

都城市文化財調査報告書第11集

平成元年度

# 遺跡発掘調査報告

久玉遺跡(第2次調査)

野々美谷城跡

向原第1・2遺跡

竹山・胡麻ヶ野地区試掘調査

1990.3

都城市教育委員会

## 序

この報告書は平成元年度都城市教育委員会が実施した4件の埋蔵文化財発掘調査の報告です。

掲載した遺跡は郡元町の久玉遺跡、野々美谷町の野々美谷城跡、立野町の向原遺跡で、この他西岳地区試掘調査の結果も報告してあります。

都城市内の遺跡詳細分布調査も昭和61年度から実施し、平成元年度で完了しましたが、遺跡数は400ヶ所以上に上っています。近年の公的な大規模事業や民間の宅地造成等の地域開発は、その数を年々増加しており、それに伴い都城市内の発掘調査も増加の一途を辿っております。都城市は平成元年度文化課を設置し、文化財保護及び文化振興の充実にさらに力を入れているところであります。

本書が市民の皆様の文化財に対する理解の一助となり広く活用されることを願うと共に研究資料の一つとなれば幸いです。

最後に、発掘調査から資料整理に至るまで地元関係者をはじめ多くの方々にご協力をいただきました。心から謝意を表すものです。

平成2年3月

都城市教育委員会  
教育長 久味木 福 市

## 例 言

1. 本書は平成元年度都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 掲載した遺跡は久玉遺跡(郡元町)、野々美谷城跡(野々美谷町)、向原遺跡(立野町)で、この他西岳地区試掘調査の結果も掲載した。
3. 本書の執筆は各遺跡の調査担当者が分担してあつた。
4. 本書の編集は都城市教育委員会文化課が行つた。

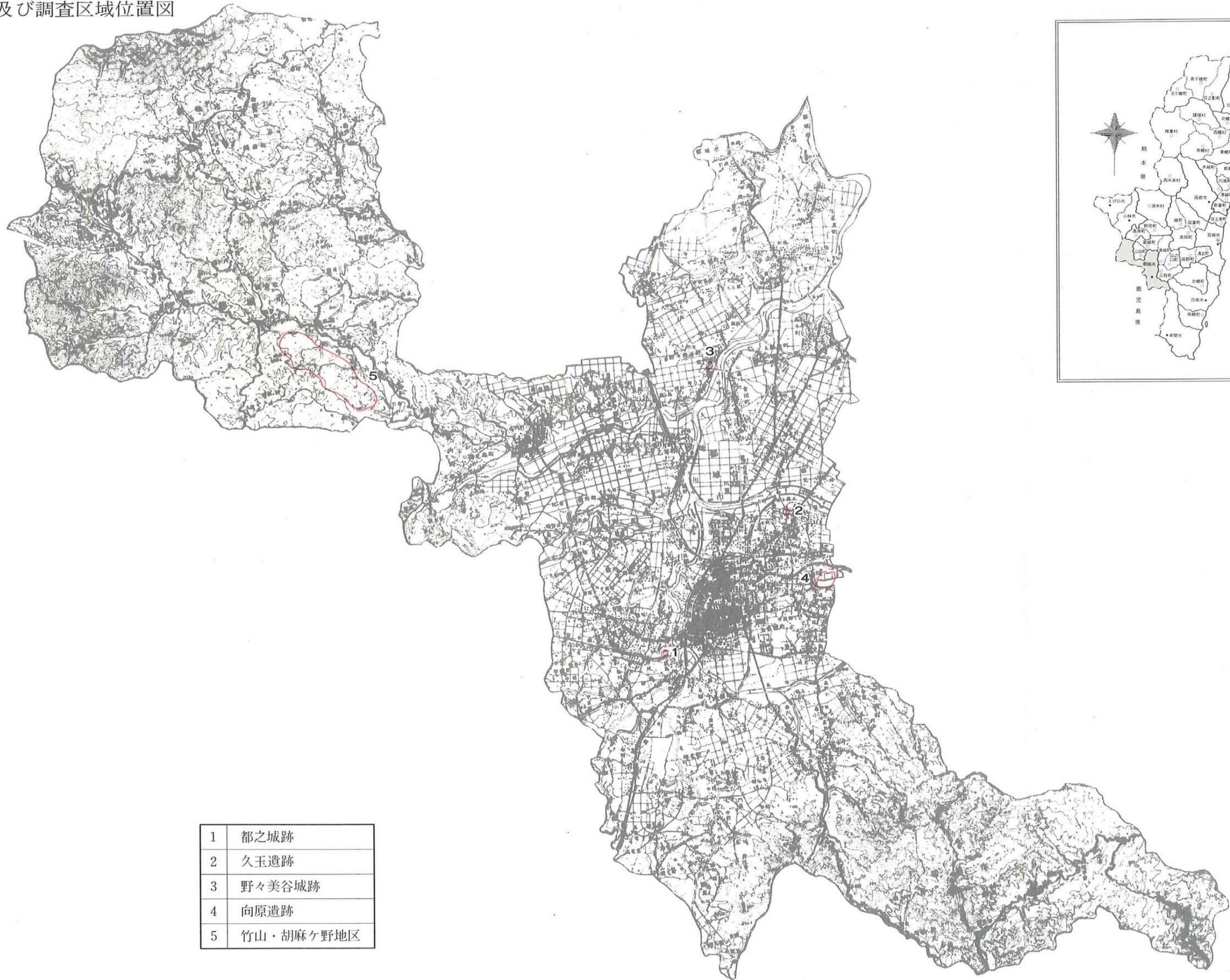
## 目 次

I. 平成元年度発掘調査一覧表 .....	3
II. 本書掲載遺跡及び試掘調査地区位置図 .....	5
III. 久玉(第2次)遺跡 .....	7
IV. 野々美谷城跡 .....	21
V. 向原第1・2遺跡 .....	31
VI. 竹山・胡麻ヶ野地区試掘調査 .....	51

# I 平成元年度発掘調査一覧表

遺跡番号	5027	遺跡名	都之城跡	所在地	都城市都島町
調査面積	500㎡	調査期間	第2次調査 平成元.6~8	調査員	栗畑光博 重永卓爾
調査目的	モデル木造建築物建設に伴う発掘調査				
遺跡番号	4006	遺跡名	久玉(第2次)	所在地	都城市郡元町
調査面積	2,000㎡	調査期間	平成元.6~8	調査員	矢部喜多夫
調査目的	都市計画祝吉・郡元区画整理事業に伴う発掘調査				
遺跡番号	10005	遺跡名	野々美谷城跡	所在地	都城市野々美谷町
調査面積	1,120㎡	調査期間	平成元.9	調査員	栗畑光博
調査目的	宅地造成に伴う発掘調査				
遺跡番号	4012	遺跡名	向原第1・2	所在地	都城市立野町
調査面積	7,300㎡	調査期間	平成元.7~12	調査員	栗畑光博 重永卓爾
調査目的	大学用地造成に伴う発掘調査				
遺跡番号		調査地区名	竹山 胡麻ヶ野	所在地	都城市美川町
調査対象面積	350ha	調査期間	平成元.12~ 平成2.2	調査員	矢部喜多夫
調査目的	遺跡確認調査				
遺跡番号	5027	遺跡名	都之城跡	所在地	都城市都島町
調査面積	2,800㎡	調査期間	第3次調査 平成2.1~	調査員	栗畑光博 重永卓爾
調査目的	城山公園再整備事業に伴う発掘調査				

II 遺跡及び調査区域位置図



1	都之城跡
2	久玉遺跡
3	野々美谷城跡
4	向原遺跡
5	竹山・胡麻ヶ野地区

### Ⅲ 久玉遺跡(第2次)

## 例 言

1. 本調査は、平成元年度都城市教育委員会が実施した発掘調査概報である。
2. 調査は、平成元年6月16日から同年8月31日までの期間で行った。
3. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
4. 方位は、すべて磁北である。
5. 調査担当は矢部で、執筆・編集も行った。また、実測について文化財整理作業員の協力を得た。
6. 本調査で出土した遺物は、都城市教育委員会で整理・保管している。

## 1. 調査に至る経緯

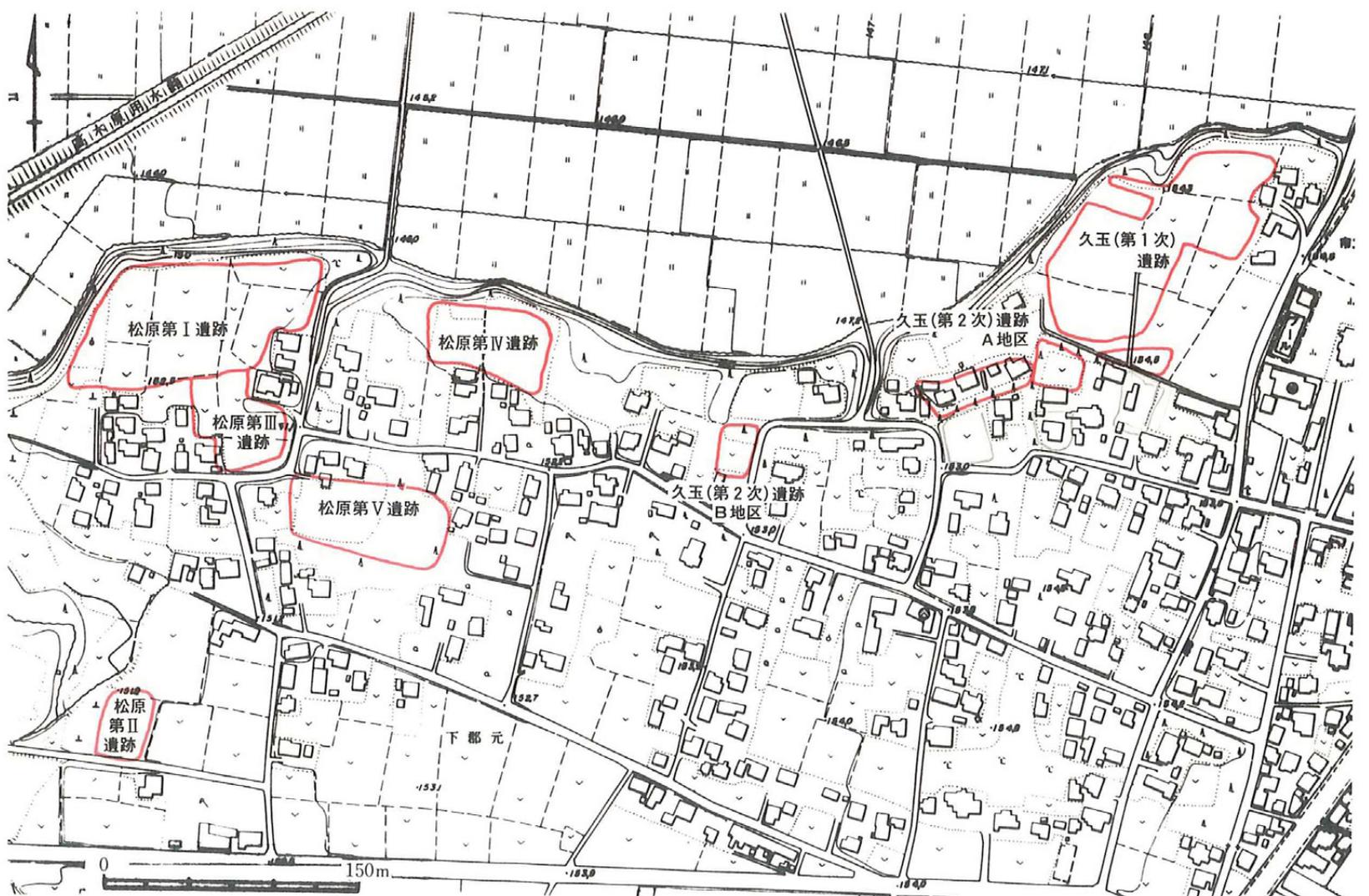
郡元・祝吉地区区画整理事業は昭和54年から実施され、すでに61haの土地が区画整理されている。それに伴う発掘調査は、昭和55年をかわきりに平成元年度で第7次の調査を迎えるわけである。平成元年度、都城市区画整理課の実施する同地区の区画整理事業面積は3haである。同年4月、同課と協議を行った結果、現況が畑地もしくは荒地である面積約2,000㎡を同年6月16日から8月31日までの期間で発掘調査を実施することとした。

## 2. 遺跡の概要

久玉遺跡は都城市郡元町字久玉に所在する。

遺跡は都城市街地を形成する台地の北縁部、大淀川の支流である沖水川により浸蝕された河岸段丘を呈し、北側低地水田との比高差が約10m程の標高150m程に立地している。郡元・祝吉町内の遺跡は西から祝吉遺跡、松原遺跡そして久玉遺跡と連続してつながっており、地形的からもお互い関連性の強い遺跡であることがうかがえ、発掘調査の結果からも中世から近世の大規模な集落跡であることがわかってきている。

当遺跡の基本土層層序は、第Ⅰ層耕作土・第Ⅱ層白ボラ（文明期に桜島より噴出した軽石）



第1図 郡元町内遺跡位置図

・第Ⅲ層黒褐色砂質土・第Ⅳ層御池ボラ・第Ⅴ層漆黑粘質土・第Ⅵ層アカホヤ・第Ⅶ層明黒褐色シルト…と続く。遺物包含層は第Ⅲ層黒褐色砂質土で、遺構検出面は第Ⅳ層御池ボラ上面である。また、調査区域をA地区B地区に分けた。

### 3. 調査の内容

#### (1) A地区

調査は、調査区域をN・S線に一致するグリッド法による10×10mのメッシュに区割した。このメッシュは久玉第1次調査と同一のものをを用い、南北方向は北からアルファベットを、東西方向は東から算用数字を用いて表記した。

##### ①-1 大溝

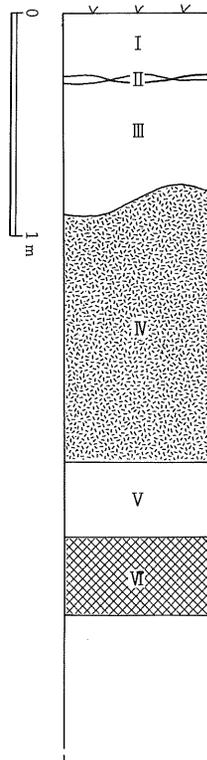
久玉第1次で検出した大溝に連続するものである。検出面から最深部まで1.3mを測るが、溝幅の大きさは道路と重複しているため明確には判断できない。走行についても南側調査区域外の民家に進んでいることしか予測できない。

##### ①-2 道路

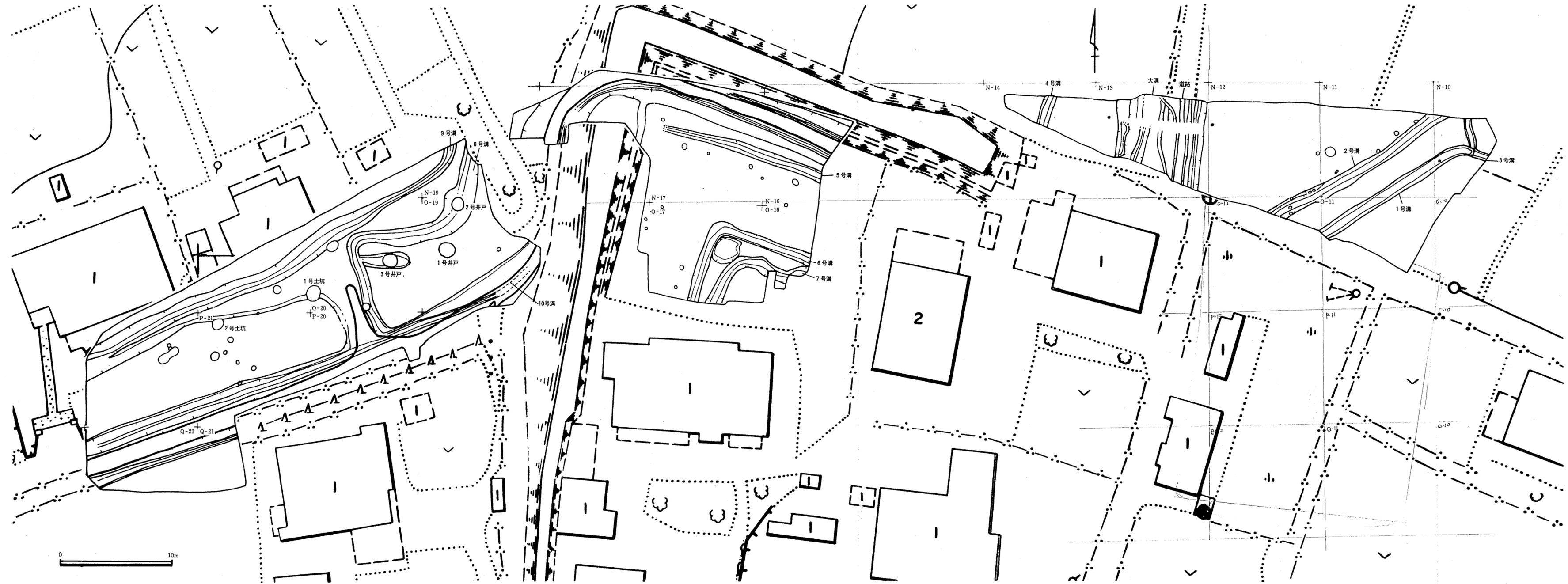
久玉第1次で検出した道路に連続するものである。N・12区から北側はほぼ直線的に北に延び崖下水田に達する（第1次調査結果。全面調査でないため推測を含むが、N・12区から南側民家にはいり、そこで西に折れ、N・16区で再び現れS字状にクランクし、その後は直線的に西方に走行し、P・21区でT字形に分かれている。また、この道路は両側に側溝様の溝を備えている。

##### ①-3 溝

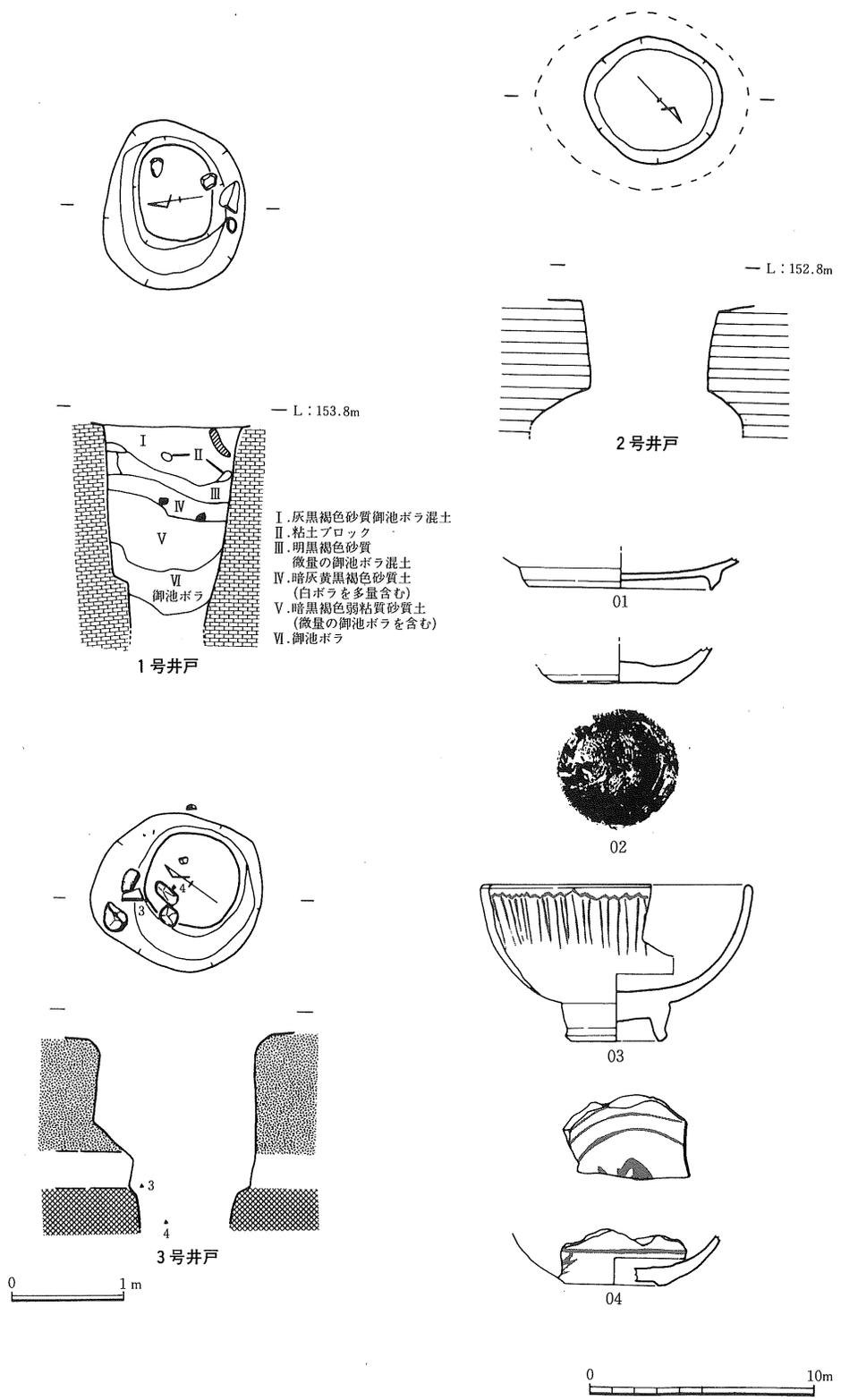
溝状遺構は合計9条検出した。埋土の違い（第Ⅰ層と第Ⅲ層）により大まかに2時期に分けられる。1号溝と2号溝はほぼ並行に走行しており、溝の形状（溝幅1.0m・底幅0.5m・深さ0.4m）も類似し、埋土も第Ⅲ層である。3号溝はN・10区調査区域端部で西から北へ屈曲しながら走行し、溝幅0.7m・底幅0.4m・深さ0.1mを測る。1号溝との切り合い状況は不明であるが、1号溝とは溝の深さにおいて明らかな違いをみせている。4号溝は、N・14区をほぼ南北に走行し、溝幅0.8m・底幅0.3m・深さ0.3mを測る。埋土は白ボラを含む第Ⅲ層黒褐色土である。この4号溝は第Ⅰ次



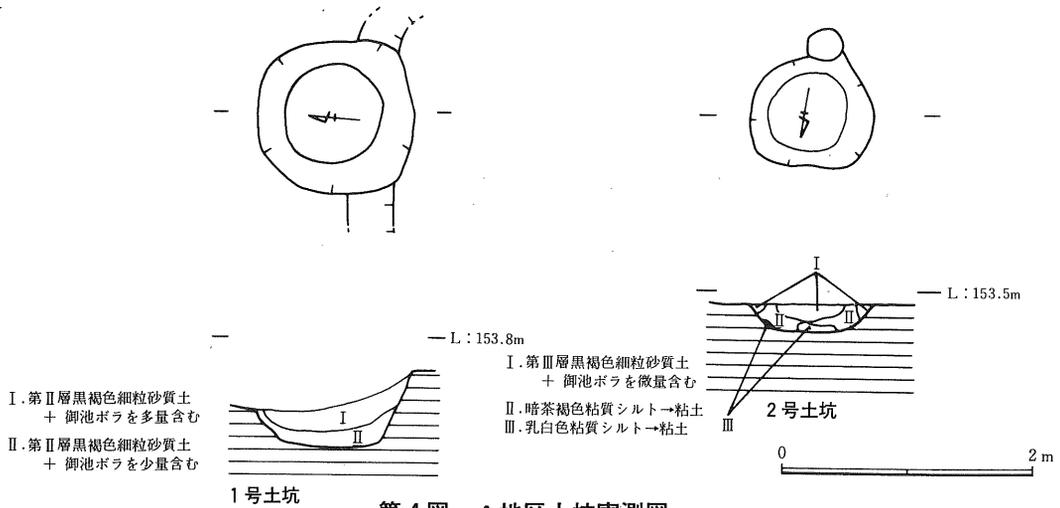
基本土層柱状図



第2图 A地区遺構配置図



第3図 A地区井戸及び井戸内出土遺物実測図



調査の6号溝とつながる。5号溝はN・16区を西走しN・17区で消失する。6・7号溝はO・16区を西に並走しO・17区で南へ、6号溝はほぼ直角に屈折し、7号溝も同様に屈曲し南側調査区域外へと進んでいる。埋土は両方とも第Ⅰ層である。8・9号溝は最初の検出状況では、8・9号溝を含み広範囲にわたる第Ⅰ層の落込みとして確認した。言い換えると、最初検出した御池ボラ層を0.2~0.3m掘り下げた段階で溝と判断できた。埋土は両方とも第Ⅰ層である。10号溝は道路構築前に存在していた溝で、埋土に白ボラを含んでいる。

#### ①-4 井戸

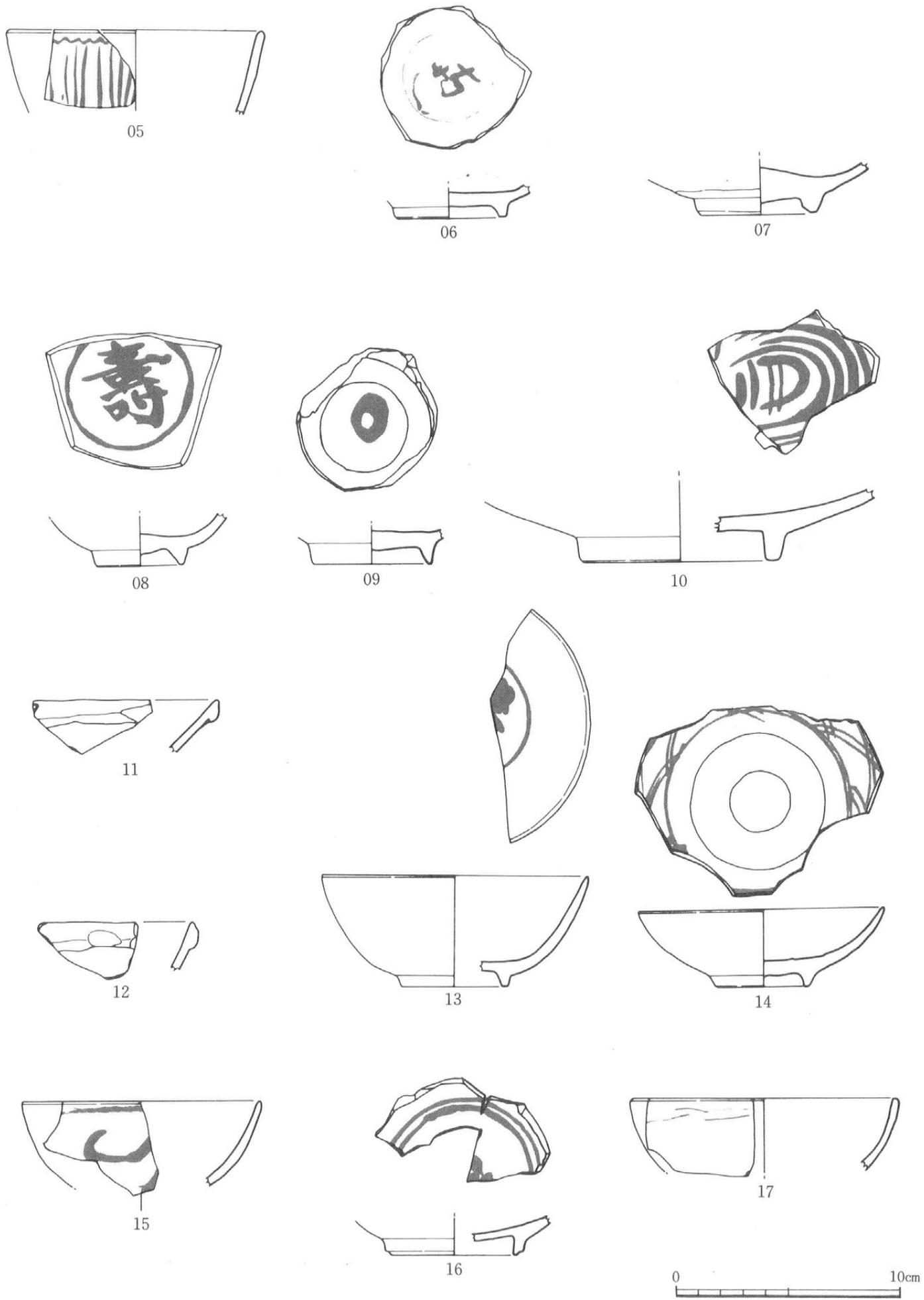
3基の井戸を確認したが、3基とも隣接している。1号井戸は検出面での形状は南北1.25m、東西1.5mをなす。深さ約1.5mで段を生じていることから、原形状は径が0.8~1.0m程の正円に近いものである。2号井戸はO・19区8号溝内に位置している。8号溝と2号井戸との埋土の違いをみいだせないことから、ほぼ同時期に存在していたと考えられる。形状は南北1.2m、東西1.1mのほぼ正円でやや内傾し、深さ0.8m程で、湧水による御池ボラの崩壊によりフラスコ状に変形している。8号溝は南から北へ傾斜し仮に水路的機能を持つとするならば、2号井戸は井戸としての機能を満たせないようであるが、現時点では井戸として扱う。3号井戸は形状南北1.5m、東西1.4mの隅丸方形をなす。これは御池ボラの崩壊によって変形したもので、現形状は検出面下1.4mのアカホヤ面の径0.9mの円形である。

#### ①-5 土坑

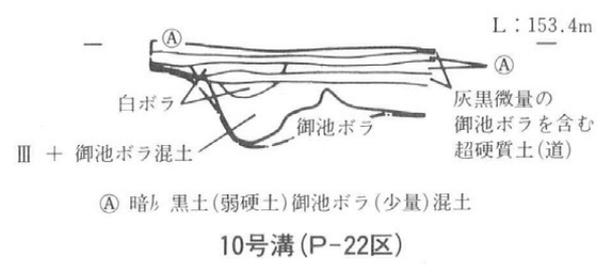
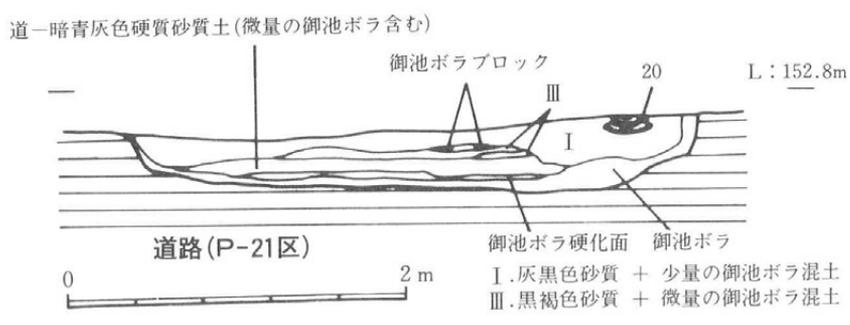
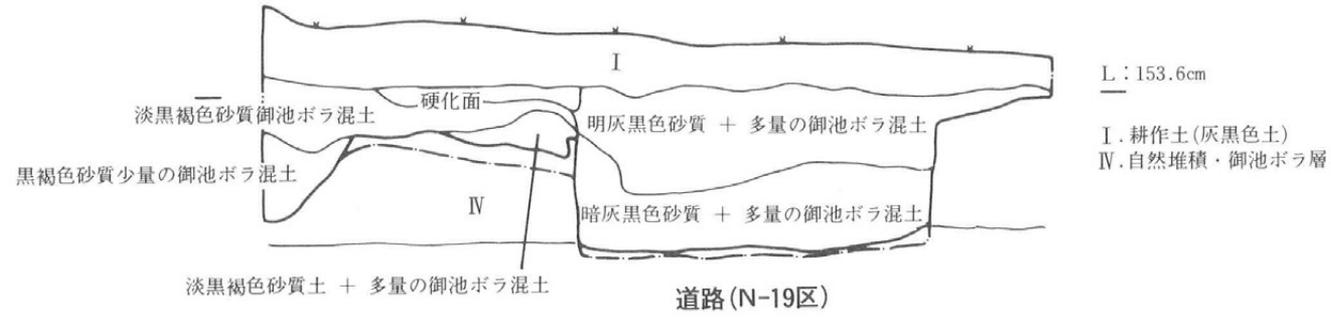
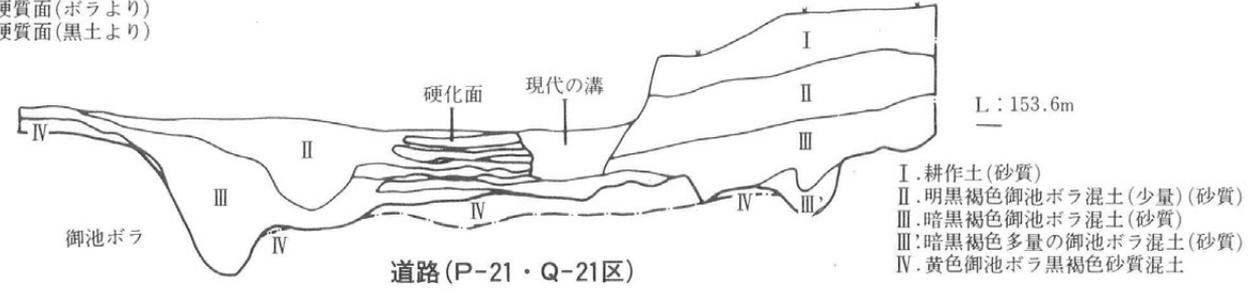
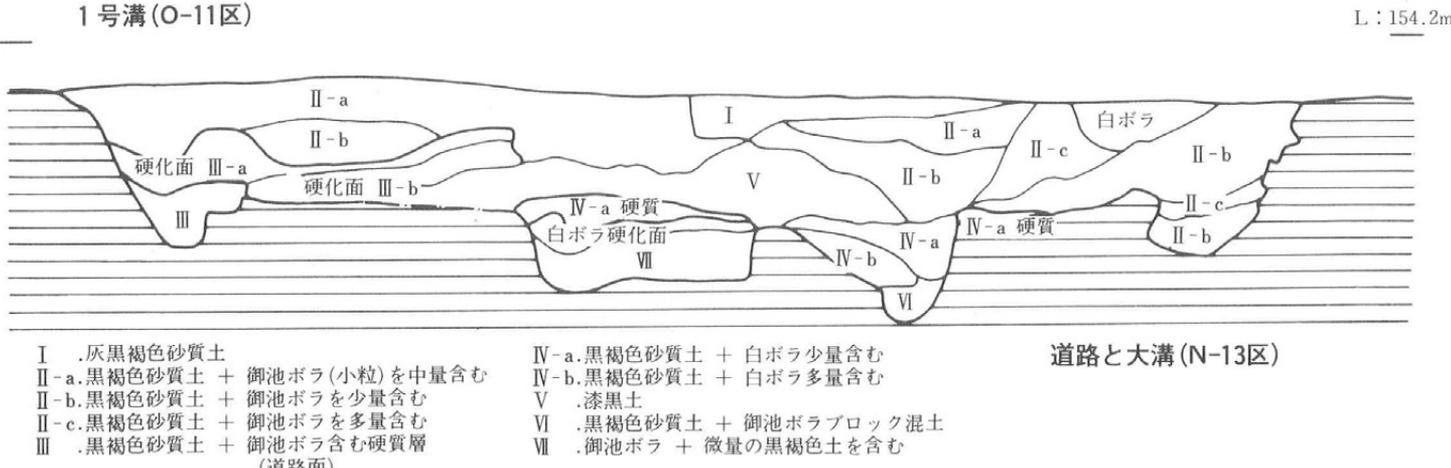
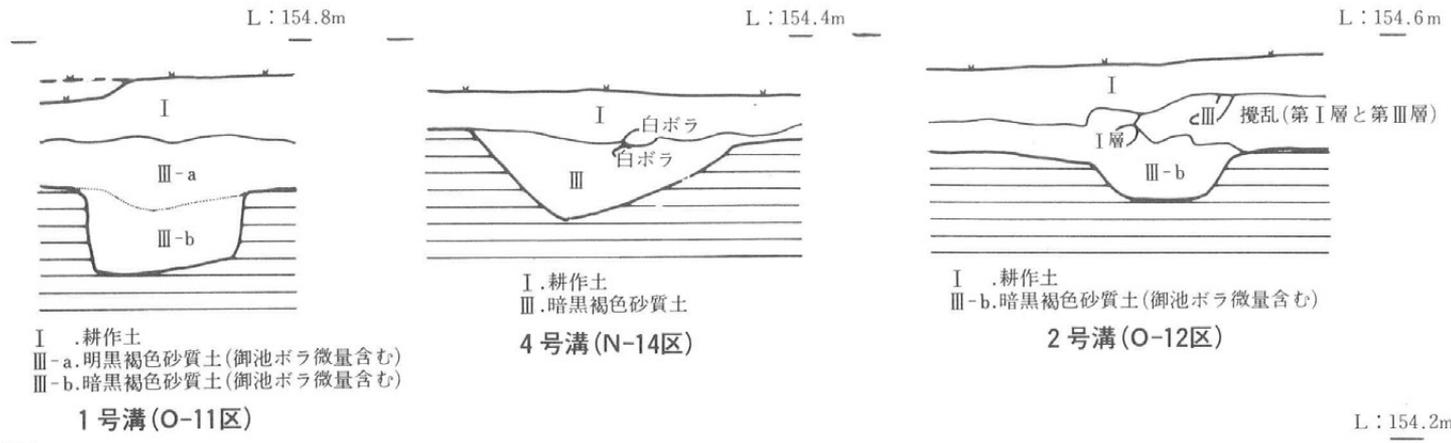
1号土坑は南北1.5m東西1.2mの隅丸方形で深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色土である。2号土坑は径1.0~0.9mの円形で深さ0.2mを測る。埋土は床面で乳白色ないし暗褐色の粘質シルトが堆積している。

#### ② 遺物

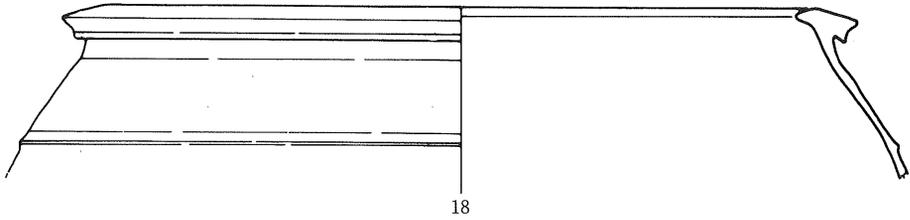
出土遺物は、全体に近世以後のものが多く、遺構内出土の遺物は少なかった。遺物の種類は、



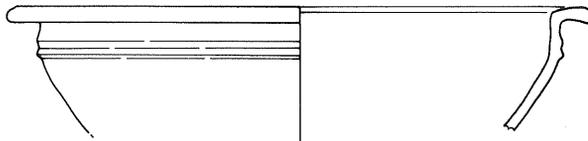
第5图 A地区出土遗物实测图(1)



第7図 A地区各遺構土層断面図



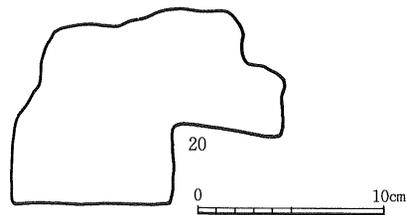
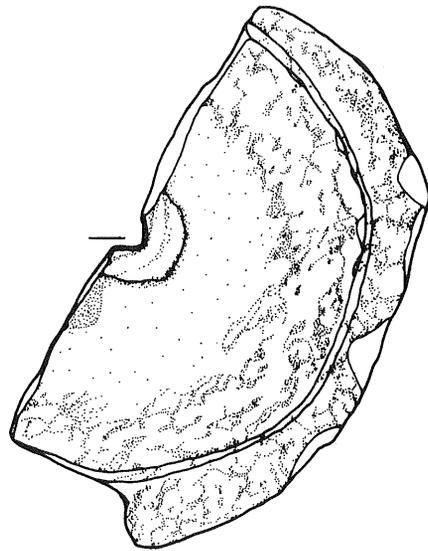
18



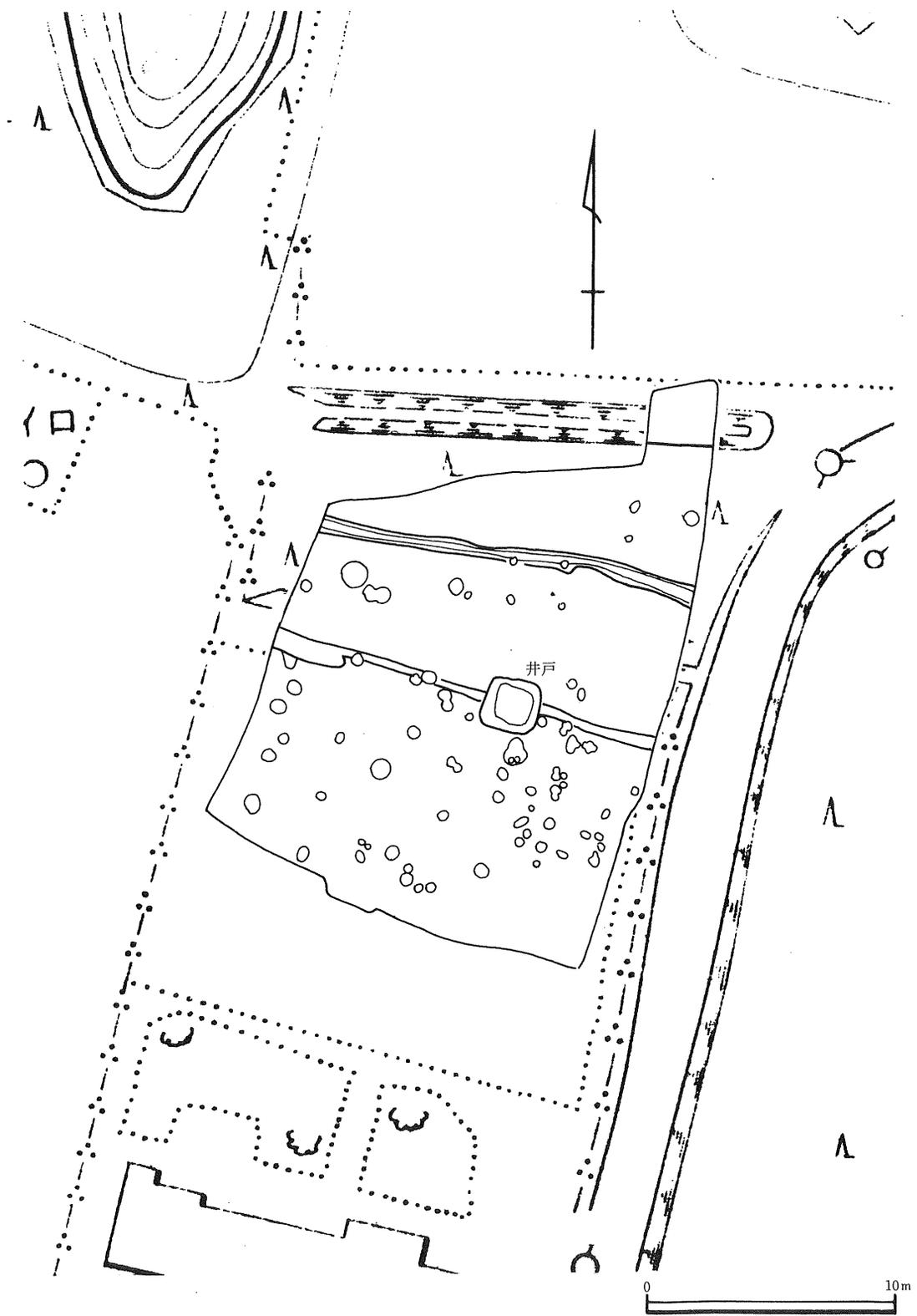
19

中・近世の陶磁器類、土師器、石製品（砥石）、古銭等である。

白磁(1)と土師器(2)は1号井戸内出土である。白磁皿は底径8.2cm、土師器環は底径5.4cmの糸切り底である。青磁(3)と青花(4)は3号井戸内出土である。青磁碗は体部外面に剣先蓮弁文、青花皿は碁笥底である。青磁碗(5)大溝埋土中より出土し、口径11.4cmで体部外面に剣先蓮弁文を施す。碗(6)は底径3.9cmで内面見込みに印花文を、碗(7)は底径5.3cmを計る。(8)～(10)は9号溝内出土である。染付碗(8)は底径3.9cm見込みに円に壽文を、青花碗(9)は底径5.2cm、見込みは蛇ノ目釉はぎ、唐津系皿(10)は底径8.8cmを計り、内面は白い化粧土に銅緑釉を、外面は刷毛目に透明釉を施している。白磁碗(11)・(12)は玉縁の口縁で、(11)は10号溝(12)は道路より出土している。肥前系皿(14)は体部内面に格子目文を施し、青花碗(15)ともに道路内出土である。



第6図 A地区出土遺物実測図(2)



第8图 B地区遺構配置図

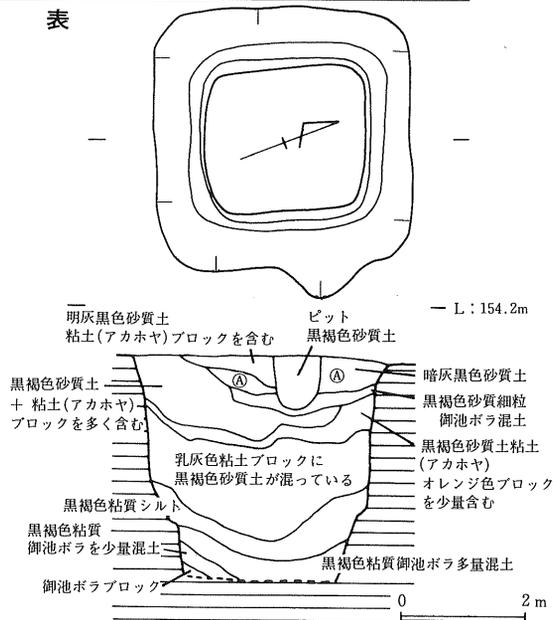
遺物番号	種別	器種	グリッド (遺構)	法 量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	底径	器高		
01	白磁	皿	O - 19 (1号井戸)	—	8.2	—		15C中～16C中
02	土師器	坏	O - 19 (1号井戸)	—	5.4	—	糸切り底	
03	青磁	碗	O - 20 (3号井戸)	11.9	4.0	7.0	㊦ 剣先蓮弁文	15C中～16C中
04	青花	皿	O - 20 (3号井戸)	—	4.2	—	碁笥底	16C代
05	青磁	碗	N - 13 (大溝)	11.4	—	—	㊦ 剣先蓮弁文	15C後半～16C中
06	青磁	碗	O - 19 (8号溝)	—	3.9	—	㊦ ㊧ 画花文	15C～16C前半
07	青磁	碗	O - 19 (8号溝)	—	5.3	—		16C代
08	染付	碗	N - 20 (9号溝)	—	3.9	—		16C代
09	青花	碗	O - 21 (9号溝)	—	5.2	—	㊧ 蛇ノ目釉はぎ	16C代
10	唐津	皿	H - 19 (9号溝)	—	8.8	—	㊦	17C前半～中
11	白磁	碗	(10号溝)	—	—	—	玉縁口縁	12C～14C前半
12	白磁	碗	O - 19 (道路)	—	—	—	玉縁口縁	12C～14C前半
13	青花	碗	O - 19 (道路)	11.9	4.8	5.0		16C代
14	青花	皿	O - 19 (道路)	11.1	4.1	3.5		18C中～末
15	青花	碗	O - 19 (道路)	10.8	—	—		16C代
16	青花	皿	N - 18	—	5.1	—		16C代
17	白磁	碗	O - 21	11.8	—	—	㊦ 文様線ぼり	15C中～16C中

観 察 表

(2) B地区

A地区から西へ130mほどで、調査面積約250㎡である。

遺構は溝状遺構・ピット・井戸状遺構等を検出した。また、遺物は遺構内も含めてほとんどなかった。ピットについては大小と大きさの違いのほか、埋土で第Ⅲ層黒褐色土と第Ⅰ層灰黒色土に区別することができた。井戸状遺構は南北2.1m、東西2.2mの隅丸方形を呈し、断面は内傾ぎみに段を有している。約1.8mまで掘り下げたが完掘していない。埋土は第Ⅰ層灰黒色土が主体である。井戸と断定できないが現時点では井戸状遺構として取り扱う。



第9図 B地区井戸実測図

PL 1



A地区全景



大溝と道路



A 地区

PL 3



B地区全景(遠景)



遺構検出状況

IV 野々美谷城跡  
発掘調査概報

—— 曲輪3の調査 ——

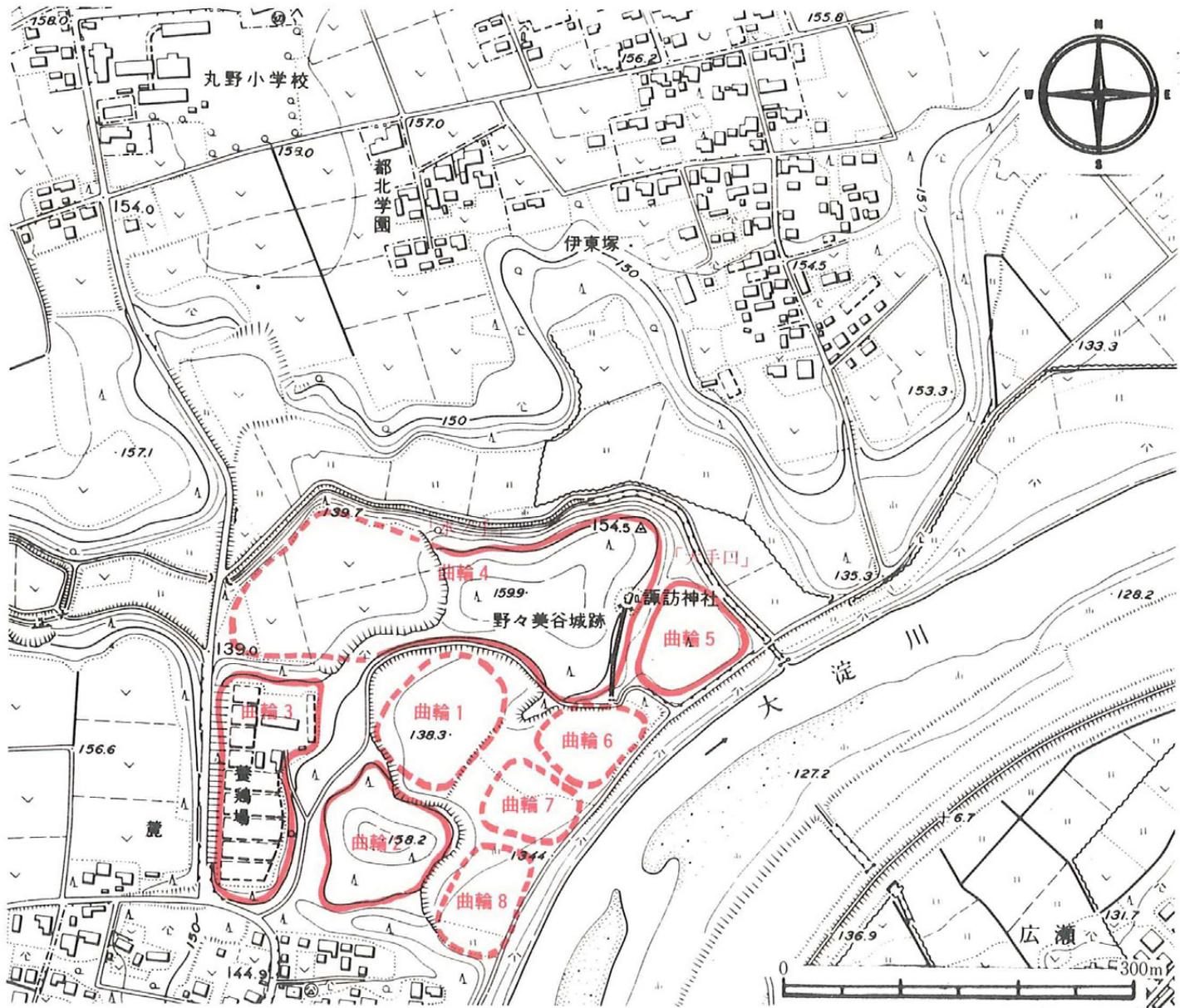
## 例 言

1. 報告する遺跡は、都城市野々美谷町所在の「野々美谷城跡…曲輪3」である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって実施し、同市文化課主事 栗畑光博が調査を担当した。なお、試掘調査は、平成元年7月4～6日に行い、宅地造成に先立つ調査は平成元年9月8日から30日まで行った。
3. 掲載した遺構実測図の作成は、栗畑、下田代清海、野口虎男、浜田寛、吉村則子、林皆子による。
4. 掲載した遺物の整理・実測・製図は、都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室において栗畑、荒木祥子、林皆子が行った。
5. 使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔高である。
6. 執筆と編集は栗畑が行った。執筆に際し、鹿児島短期大学学長 三木靖氏、都城市文化財専門員 重永卓爾氏の助言・御教示を受けた。
7. 出土遺物は、都城市教育委員会で保管している。

# 1. はじめに

## (1) 調査に至る経緯

都城市指定文化財である野々美谷城跡の一部は、有限会社霧島養鶏場の諸施設が建っていたが、昭和63年6月、当該地区に宅地造成の計画があり、その土地所有者から、現状変更申請書が提出された。これを受けて都城市教育委員会は、市文化財調査委員会に諮問し、平成元年4月28日、地形を著しく変更しないこと等の条件付きで現状変更の承認を行った。その後の開発行為に当たって、当該文化財所有者から、平成元年5月15日、土木工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。市教育委員会では、平成元年7月に行った試掘調査の結果を踏まえて、同年9月に地下の遺構・遺物に影響を与えると判断された道路建設予定部分について、記録保存のための発掘調査を行った。



「龍頭城」…曲輪1 「八幡城」…曲輪2 「西拵」…曲輪3 「諏方城」…曲輪4 (半欠)  
 「平城」…曲輪5 「尾崎城」…曲輪6 (欠) 「石垣城」…曲輪7 (欠) 「倉持城」…曲輪8 (欠)

第1図 野々美谷城跡曲輪配置図及び周辺地形図

## (2) 遺跡の立地と環境

都城盆地北東部の大淀川と丸谷川に挟まれた台地の東端部には、低地との比高差十数mの断崖を利用したいくつかの城館跡や陣跡が見られる。その中の一つである野々美谷城跡は、小谷によって切り離された独立丘状の台地に立地し、眼下を大淀川が北東方向へ流れている。

野々美谷城は、肥後国・球磨の相良氏の築城によると伝えられている。その後、樺山氏、伊東氏、北原氏などが領有し、天文11年（1543）11月16日、北郷忠相が攻めとった後は、北郷氏の領となり、内地頭を置いて支配した。文祿4年（1595）の北郷氏の祁答院改易後は、伊集院忠棟領となり、庄内合戦後は、再び北郷領となった。

現在、都城島津家に所蔵されている『野々三谷城圖』を見ると、8つの曲輪にそれぞれ「龍頭城（本丸）」「八幡城」「石垣城」「倉持城（二の丸）」「尾崎城」「諏方城」「平城」「西拵」の名称が付されている。この区分は、現在の地形図に対応させることができるが、残念ながら、シラス取りなどの開発によって、「龍頭城」「石垣城」「倉持城」「尾崎城」の全てと「諏方城」の西側半分が消失してしまっている。本稿では便宜的に、今は存在しない曲輪も含めて、改めて1～8までの番号をつけた。（第1図）

今回調査を行ったのは、曲輪3の「西拵<sup>にしこし</sup>」であり、先の古絵図には、その規模を「二十八間百二十五間 一町一反六畦二十歩」と記載してある。

## 2. 調査の概要

発掘調査の範囲は、道路（幅7m）予定地の約1,200㎡である。調査区は、便宜的に道路のセンターを基準として20mの間隔で調査範囲を区切り、A～I区を設定した。（第2図）

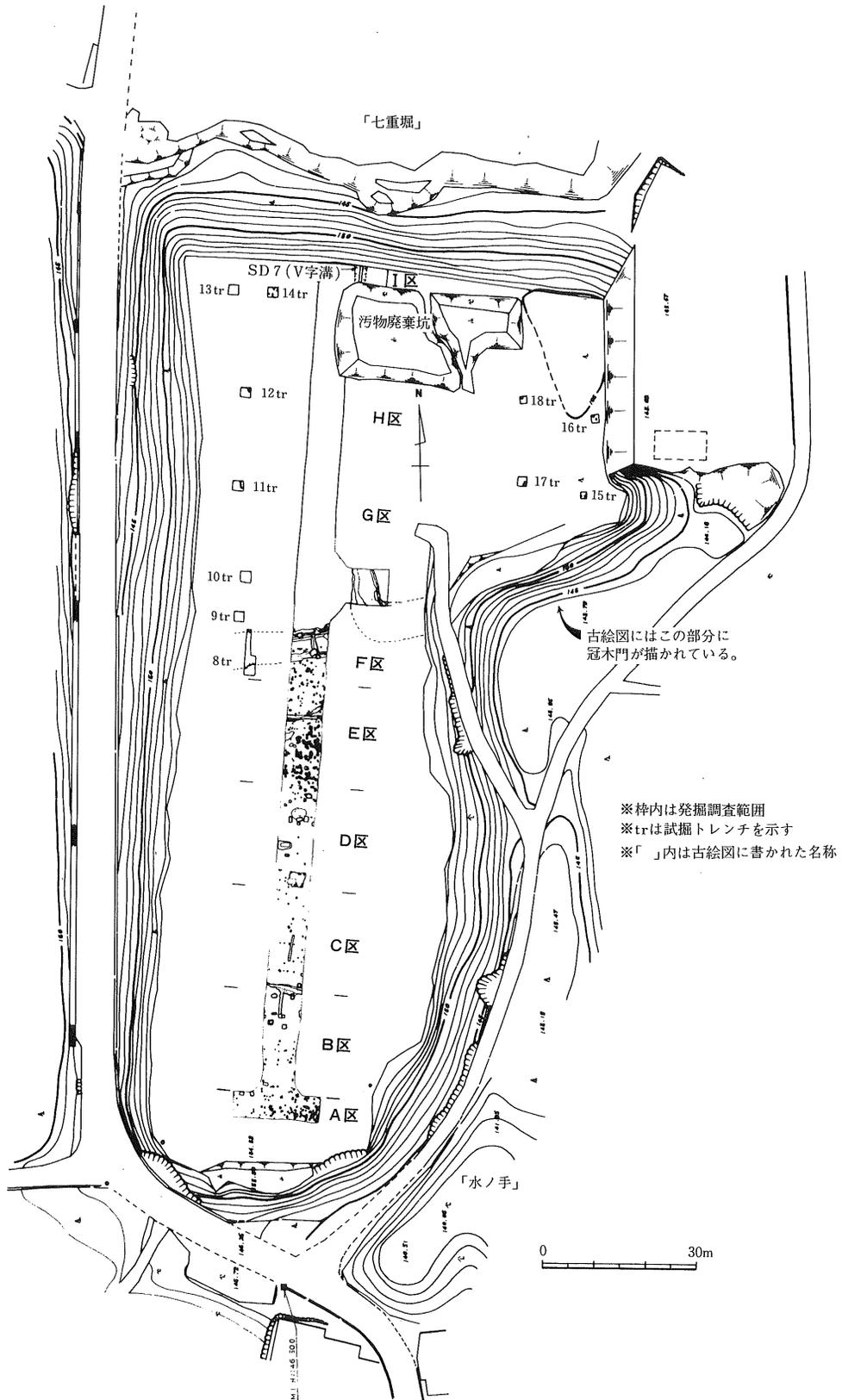
当初、鶏舎や倉庫などの基礎による破壊が懸念されていたが、包含層の削平は著しかったものの、A～F区においては、表土（暗オリーブ砂質層）を30～50cm程度除去したレベルで、御池降下軽石層があらわれ、その面で遺構を確認することができた。なお、G～H区は、既に遺構の破壊が著しく、調査不能であった。検出された遺構は、土坑28（試掘分を含めると31）、掘立柱建物跡4、柵列（ピット列）6、溝状遺構7、道路跡3等である。遺物はそれらの遺構にともなって、陶磁器、金属製品、石臼等が出土した他、金属加工関連遺物の出土もみられた。

上記の調査以外に、曲輪の東側・南側斜面にみられた帯曲輪と考えられる幅2～3mの細長い段状遺構の測量も行った。調査期間は、平成元年9月8日から30日までの23日間である。

## 3. 遺構と遺物

### (1) 遺構

以下、主要な遺構について述べる。



第2図 野々美谷城跡曲輪3地形図

### 〈道路跡〉

この種の遺構は3本が確認されているが、溝状遺構SD4・5の覆土上面、およびSD7の堀底直上にも硬化層が認められ、それらは、道路としての機能も有していたものと考えられる。堀状を呈するSE2とSE3は一連のものと思われ、曲輪3における主要道路と考えられる。路面のレベルはSE2からSE3へ深くなっており(第4図)、その方向は、先述の古絵図に「冠木門」の描かれている虎口へと向かっている。したがって、虎口から曲輪内にいたる道は、東西方向から南北方向へ折れ曲がるものと推定される。(第2図)

### 〈溝状遺構〉

南北方向に走るSD1はSD2を切っており、北端は不明瞭となる。一方南端は、土坑SA6に接続している(第5図)。覆土にシラス層の堆積が認められた。SD4は東西方向に直線的に走るSD5に切られており(第3図)、下層に灰色砂の堆積が認められ、底面は東へ行くほど低くなる。SD6は東端が広がるものと推定されるが、詳細は調査区外のため不明である。なお、内部に断面形が袋状を呈する土坑2基(SA27・28)を伴っていた(第3図)。SD7は調査区域の北端(I区)で検出され、断面形は「V」字状を呈する(第2図)。堀底に硬化面が確認され、それは曲輪の北側斜面へ降りるためのものと考えられる。

### 〈土坑〉

柱穴と判別されるもの以外の穴を一括した。平面プランは円形、方形、不定形などがある。SA6は、先述したように溝状遺構SD1と接続しており、SD1が排水溝であると仮定すると、この土坑は水落としの溜枘と考えられる(第5図)。SA8は北側が調査区外へ続くため、不確定要素を含むが、隅丸の長方形プランと推定され、検出面からの深度が1.1mである。埋土中より、るつぼの破片(第7図23)が見ついている。SA15は竪穴状遺構である(第3図)。床面は硬化が認められず、不明瞭であり、内部にみられるピットもこの遺構に伴うものかどうか不明である。SA22は不定形の播鉢状凹地であり、SA20、21を切っている。SA21は方形プランで、断面形は袋状を呈する(第5図)。埋土上層に軽石やギョウカイ岩の礫が投げ込まれており、その中にギョウカイ岩製のふいごの羽口(第7図24)が含まれていた。

### 〈掘立柱建物跡〉

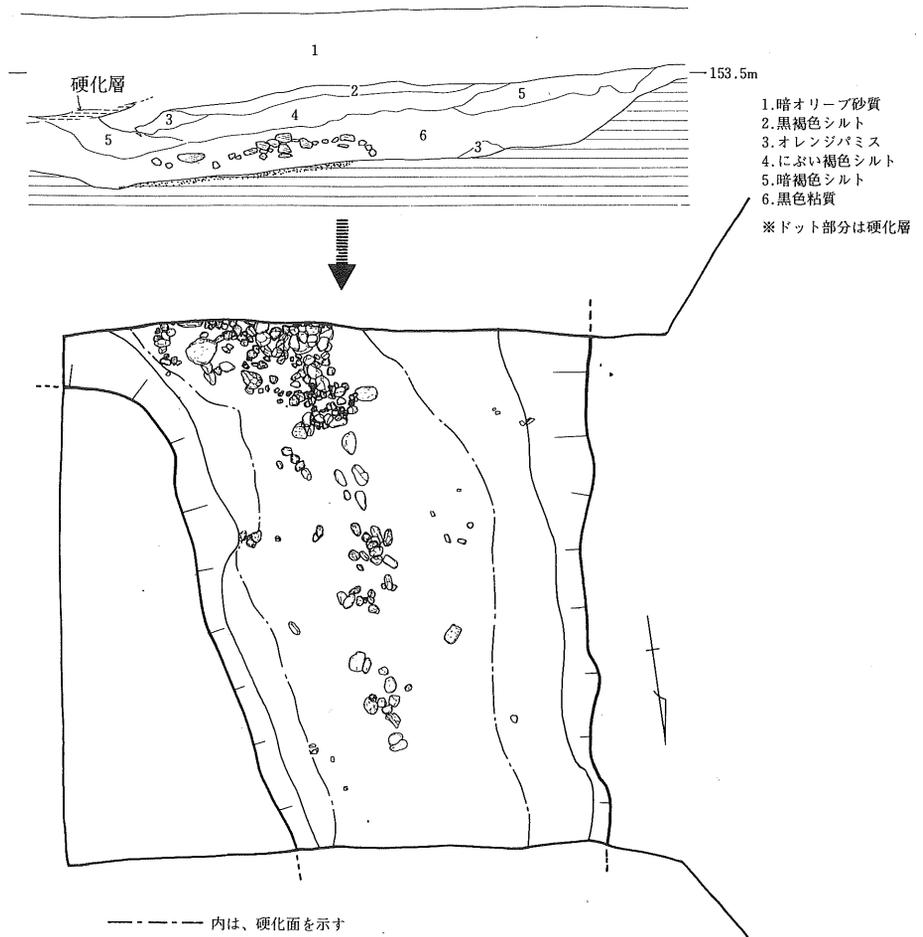
SB3は、図面上では2間×1間の南北棟の建物であるが、北側は調査区域外へと続くのかもしれない。柱穴掘形の直径は約50cmを計り、柱間は約2mである。SB4は2間×3間の東西棟の建物で、柱間は梁行・桁行ともに2mである。

### (2) 遺物

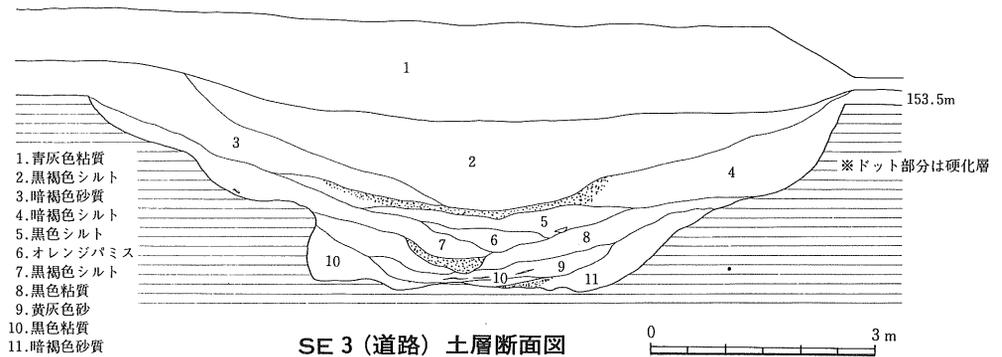
陶磁器は青磁(第6図3・8・11・14・17・22)、白磁(第6図1・2・9・15)、青花(第6図7・18・19)、褐釉陶器などの輸入陶磁器と備前焼(第6図6・12・16・20)、瀬戸焼(第6図21)などの国産陶器が出土している。それらの年代は、14世紀後半の青磁(第6図17)を上限として15・16世紀代のものが大半を占める。一方、いわゆるかわらけ(糸切り土師器)の出土は全体で十数点と、非常に少なく、瓦質火舎(第6図4)も2点のみの出土である。石臼と砥石は、SE2の覆土中から1点ずつ出土している。その他、SA23から小柄と思われる銅製品



第3図 野々美谷城跡曲輪3遺構配置平面図

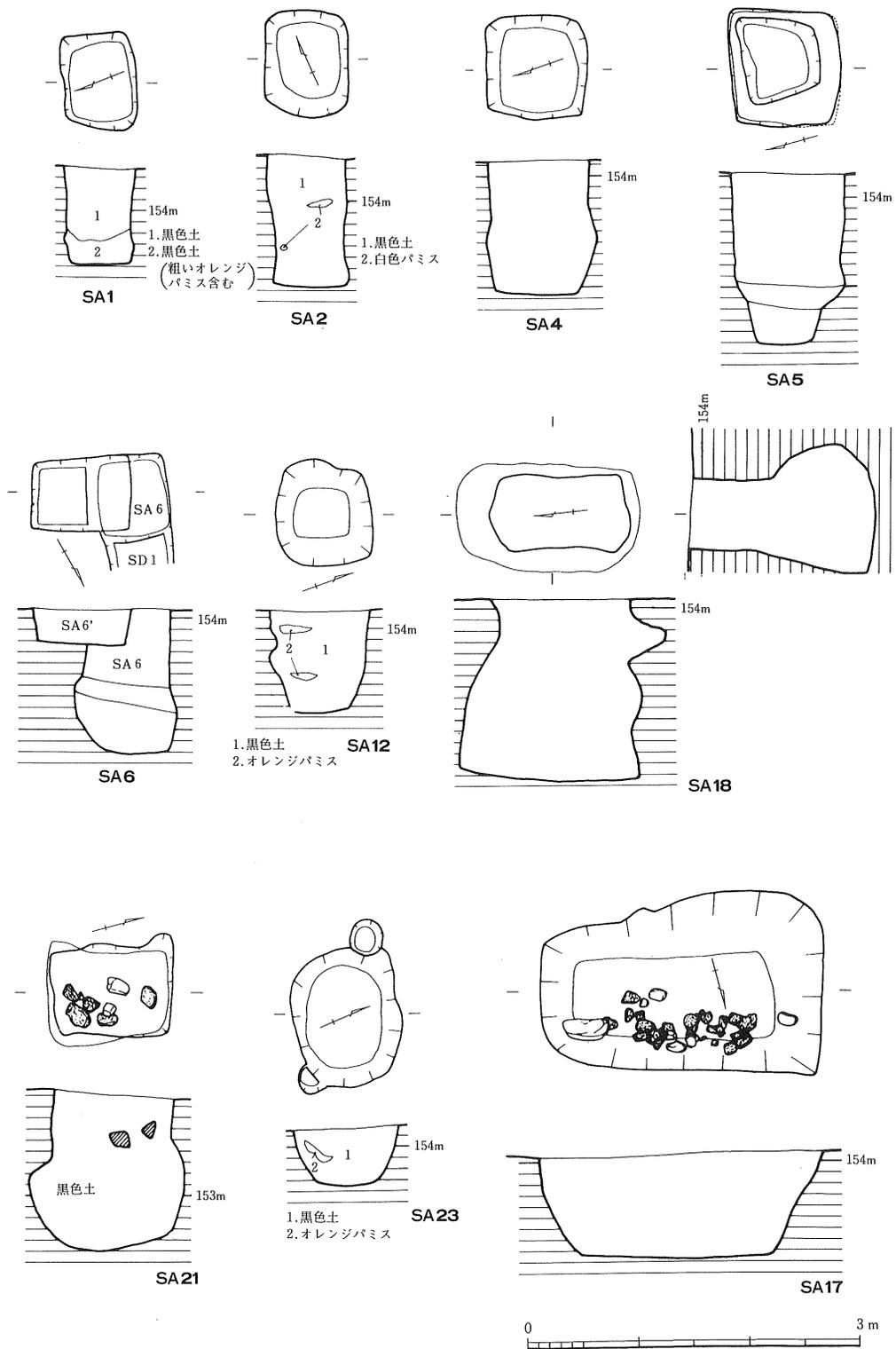


SE 2 (道路) 平面図及び土層断面図

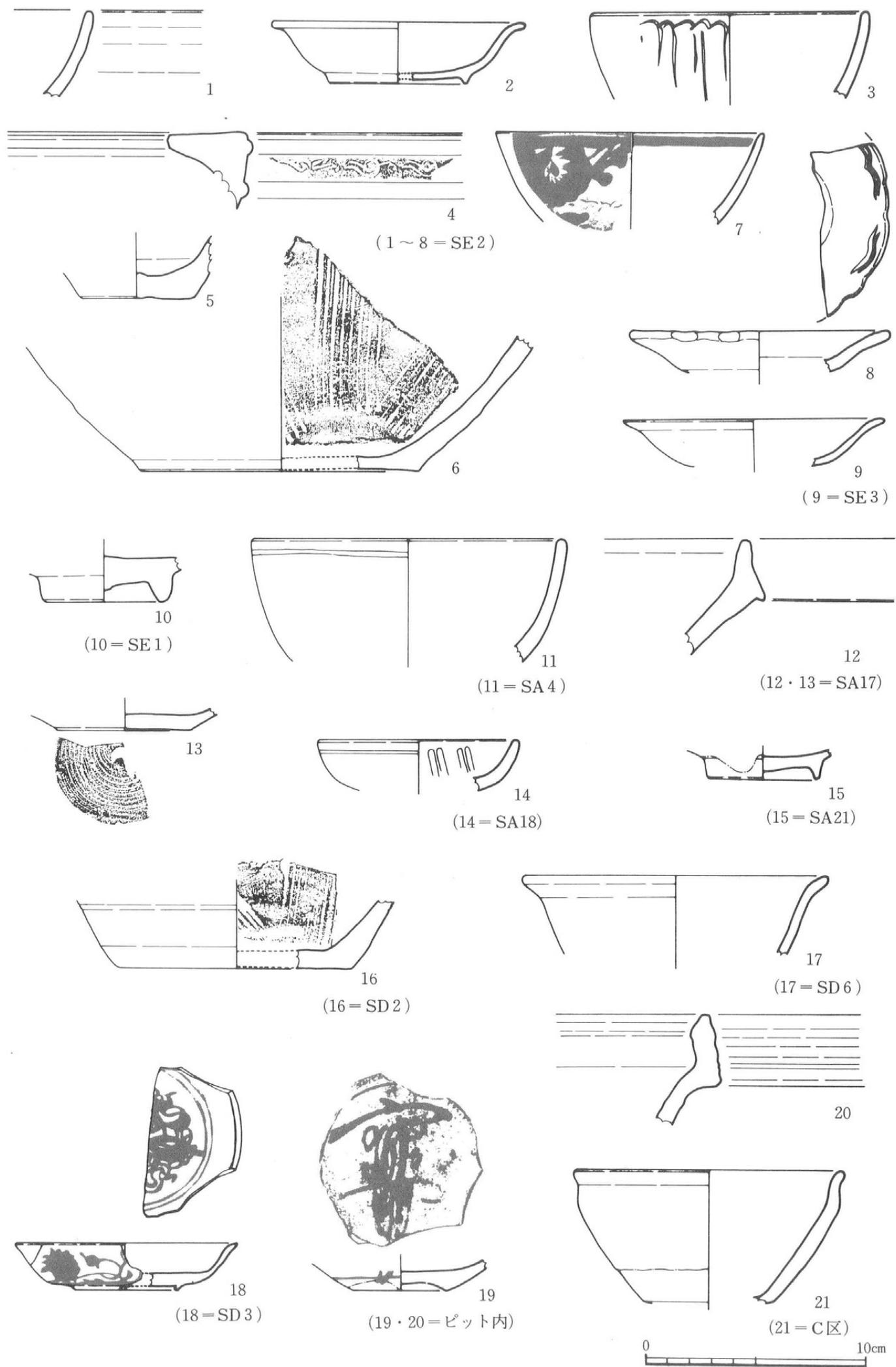


SE 3 (道路) 土層断面図

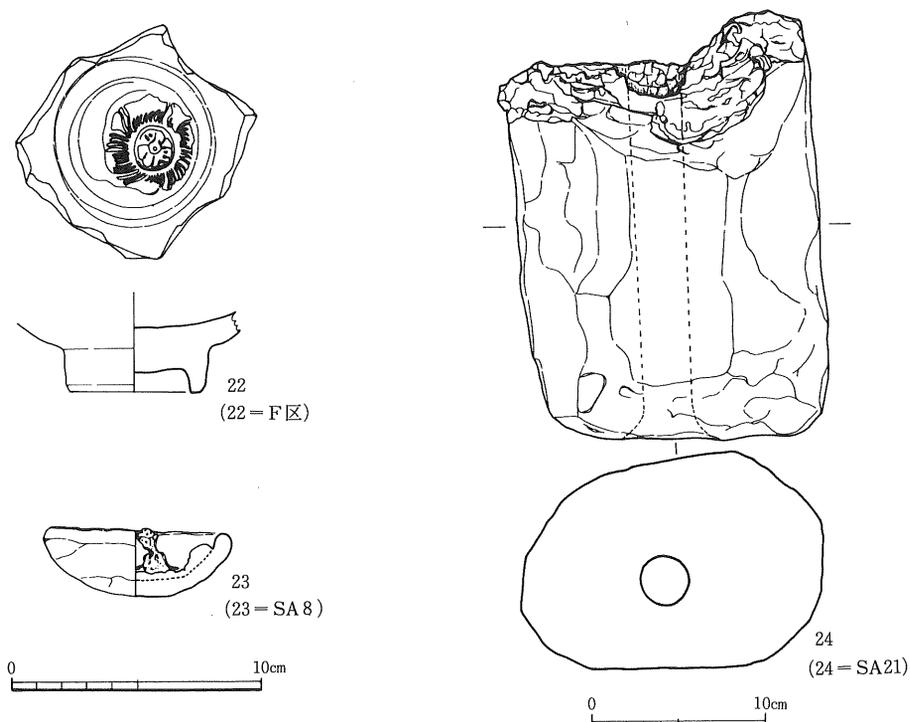
第 4 図 曲輪 3 検出遺構実測図(1)



第5図 曲輪3検出遺構実測図(2)



第6図 曲輪3出土遺物実測図(1)



第7図 曲輪3出土遺物実測図(2)

が検出された。なお、金属加工関連遺物として、SE 2の覆土中から鉄滓が数点出土したほか、方形タイプの土坑から、るつぼと大型ふいごの羽口が1点ずつ出土している。(第7図23・24)

#### 4. まとめ

今回の調査は、限られた範囲の調査ではあったが、曲輪内をあたかも細長いトレンチで南北に縦断するようなかたちとなり、遺構の分布状況について興味深い知見が得られた。つまり、建物群と推定されるピット群が調査区の南部(A区)と中央部(E・F区)に密集しており、それに挟まれた空間(B・C・D区)に土坑群の存在が認められたのである。この事実は、今後詳細な遺構群の年代決定を必要とするが、おおよそ15~16世紀の曲輪内の施設配置状況を反映しているものと考えて良いであろう。さらに、曲輪の中央東端に位置する屈折する掘状道路は、虎口からの登口遺構であると考えられる。また、検出された様々な形態の土坑のうち、方形タイプのものの機能については、その出土遺物から金属加工作業に関わる可能性を指摘できるのではなかろうか。今後、他の遺構との関連についても検討していきたい。

V 向原第1・2遺跡  
発掘調査概報

## 例 言

1. 報告する遺跡は、都城市立野町所在の「向原第1・2遺跡」である。
2. 発掘調査は、都城市教育委員会が主体となって実施した。本調査は、平成元年7月から12月まで行い、同市文化課主事 栗畑光博と文化財専門員 重永卓爾が調査を担当した。それに先立つ試掘調査は、同市文化課主事 矢部喜多夫の担当で、昭和63年4月と平成元年4月に行った。
3. 掲載した遺構実測図の作成は、栗畑、重永、矢部、野口虎男、浜田寛、林皆子、下田代清海、大盛祐子による。
4. 掲載した遺物の整理・実測・製図は、都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室において、栗畑、林、荒木祥子、阿多由美子、吉永ミヤ子、坂元千代子が行った。
5. 使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔高である。
6. 執筆と編集は栗畑が行った。なお、特別調査員として、福岡大学教授 小田富士雄氏、鹿児島大学教授 上村俊雄氏、同助手 本田道輝氏からは調査中、遺構、遺物についての指導を受けた。
7. 向原第1遺跡では、宮崎大学助教授・藤原宏志氏によるプラントオパール調査を実施した。分析結果については、正式報告書で報告する予定である。
8. 遺物は、都城市教育委員会で保管している。

## 1. はじめに

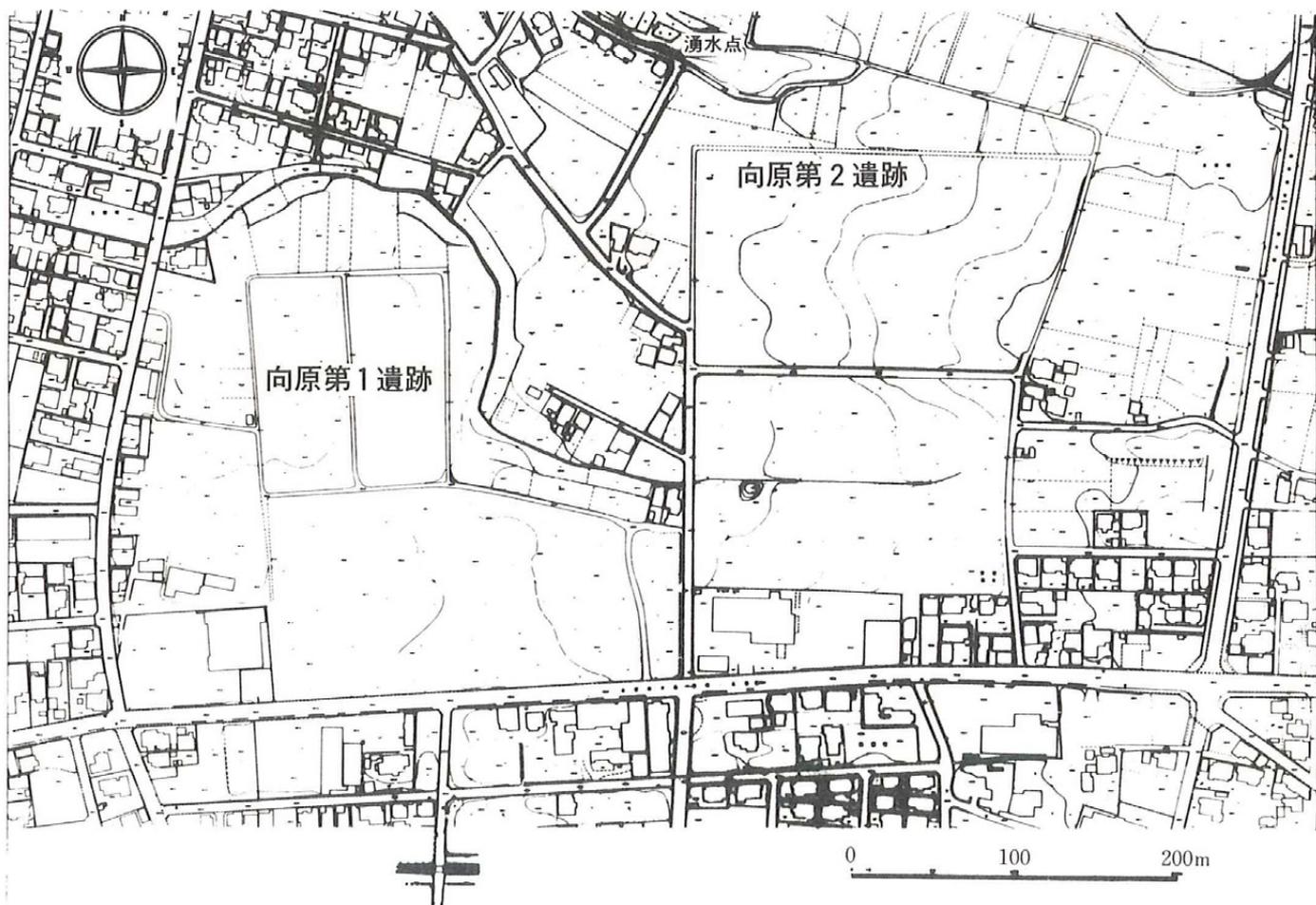
### (1) 調査に至る経緯

昭和63年4月、都城市企画調整課は市内立野町の旧都城茶業試験場跡地約9.6haを大学用地とする計画を明らかにした。当該地区は、昭和61年の市内遺跡詳細分布調査によって発見された都城市遺跡番号4012の向原遺跡に含まれており、大学用地造成にともなって、埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。これを受け、都城市教育委員会では、遺跡の範囲と性格を把握するために、昭和63年4月下旬と平成元年4月下旬に試掘調査を行い、その結果を踏まえて、平成元年7月から12月まで、建物や付設道路建設部分のいわゆる永久構築物の範囲のみについて記録保存のための発掘調査を実施した。発掘調査の総面積は約7,300㎡である。

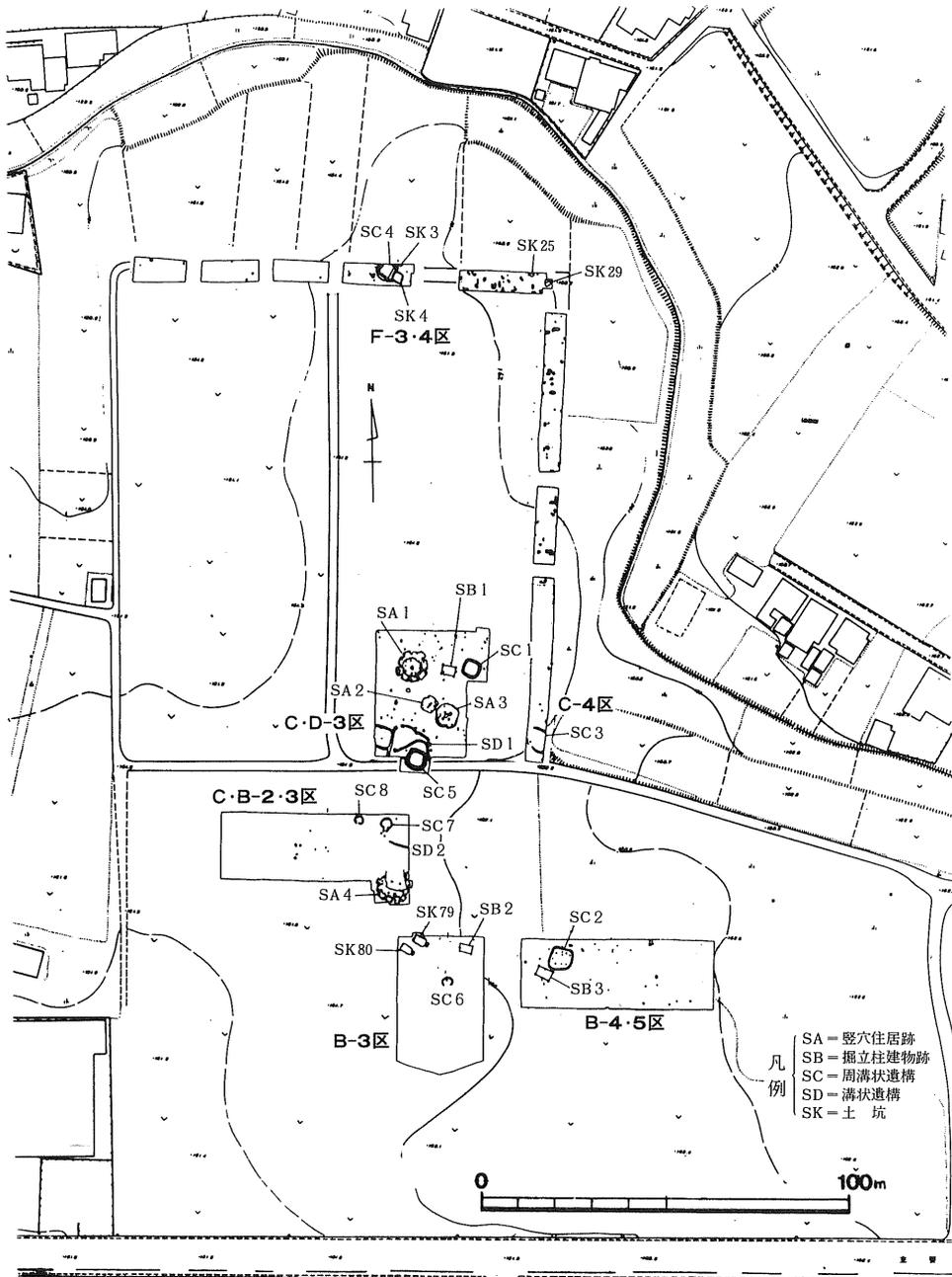
### (2) 遺跡の立地

向原遺跡は都城市立野町字向原に所在する。遺跡の立地は都城盆地の東部、三股町から都城市街地へと東から西へ流れる年見川(大淀川の支流)の南岸段丘上である。対岸の北西約0.5kmの地点には、昭和39年に宮崎県教育委員会と九州大学が共同で発掘調査を行った年見川遺跡があり、北方2kmには祝吉遺跡群がある。

遺跡の現況は標高約162m前後のほぼ平坦な地形であるが、中央に小さな谷が入り込んでおり、その西側(1工区)を向原第1遺跡、東側(2工区)を向原第2遺跡とした。(第1図)



第1図 向原遺跡地形図



第2図 向原第1遺跡遺構配置図

## 2. 向原第1遺跡の調査

### (1) 調査の概要

建物建設予定地（4か所）と道路付設予定地（6×220m）の約5,200㎡の発掘調査を、平成元年7月から10月まで実施した（第2図）。この地区の西側は水気の多いところであり、台風時期の排水対策には苦慮した。出土遺物の所属時期は縄文時代、弥生時代、中世、近世であるが、このうち、明確な遺構が検出されたのは、弥生時代と近世の2時期である。特に弥生時代には、大規模な集落が営まれており、出土した遺構・遺物ともに卓越している。各時期ごとの概要は以下のとおりである。

#### 縄文時代

3b層（黒色土）の下部から、後期に位置付けられる深鉢形土器の破片が数点出土している。

#### 弥生時代

4・5層（御池降下軽石層）に掘りこまれた各種の遺構が検出されており、遺物はそれらの遺構中及び3b層から土器、石器、炭化物などの出土がみられた。検出された遺構は、竪穴住居跡4、掘立柱建物跡3、周溝状遺構8、土坑6、周溝状遺構を囲む溝状遺構と門状遺構などがある。（第2図）

#### 中世・近世

1b層から陶磁器が出土している。また、2層（文明の桜島降下軽石）を掘りこんだ水路跡が検出されており、周辺から薩摩焼が出土している。

### (2) 弥生時代の遺構

#### 〈竪穴住居跡〉

SA1とSA4が円形プランを基調とするいわゆる花卉状住居で、いずれもその直径が9m前後と規模が大きい。一方、SA2は4m×4mの小規模の方形プランで、北西部に張り出しをもつ。また、内部に1か所だけ突出壁をもつ不定形プランのSA3は、1cm程度の粒状の鉄滓数個が南側床面に張りついた状態で検出され、加熱を受けたとみられる台石が伴出している。

#### 〈掘立柱建物跡〉

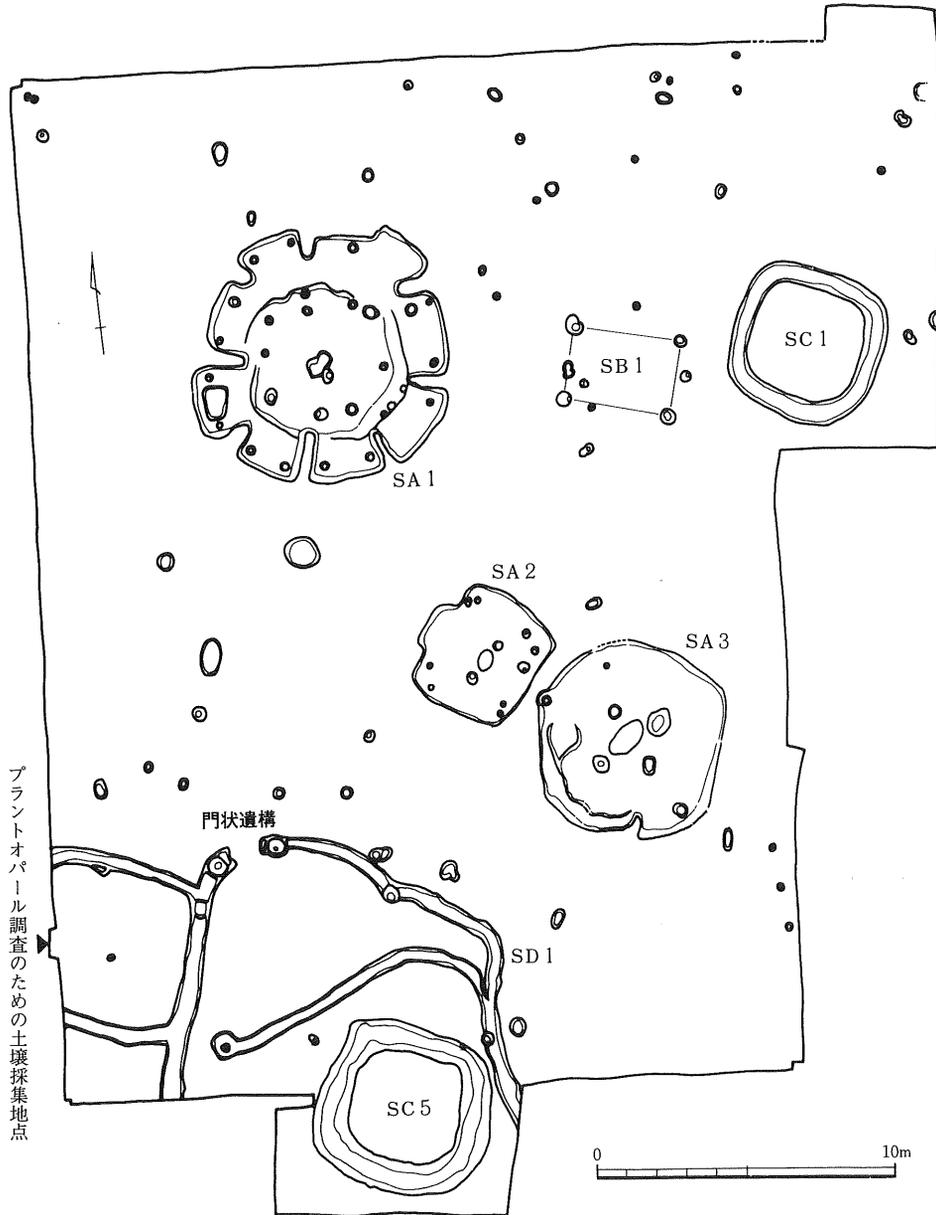
いずれも2間×1間で、4m×3m程度の規模である。又、コーナーに位置する柱穴は大きめで、直径約50cmである（第4図）。床面に焼土は検出されていない。

#### 〈周溝状遺構〉

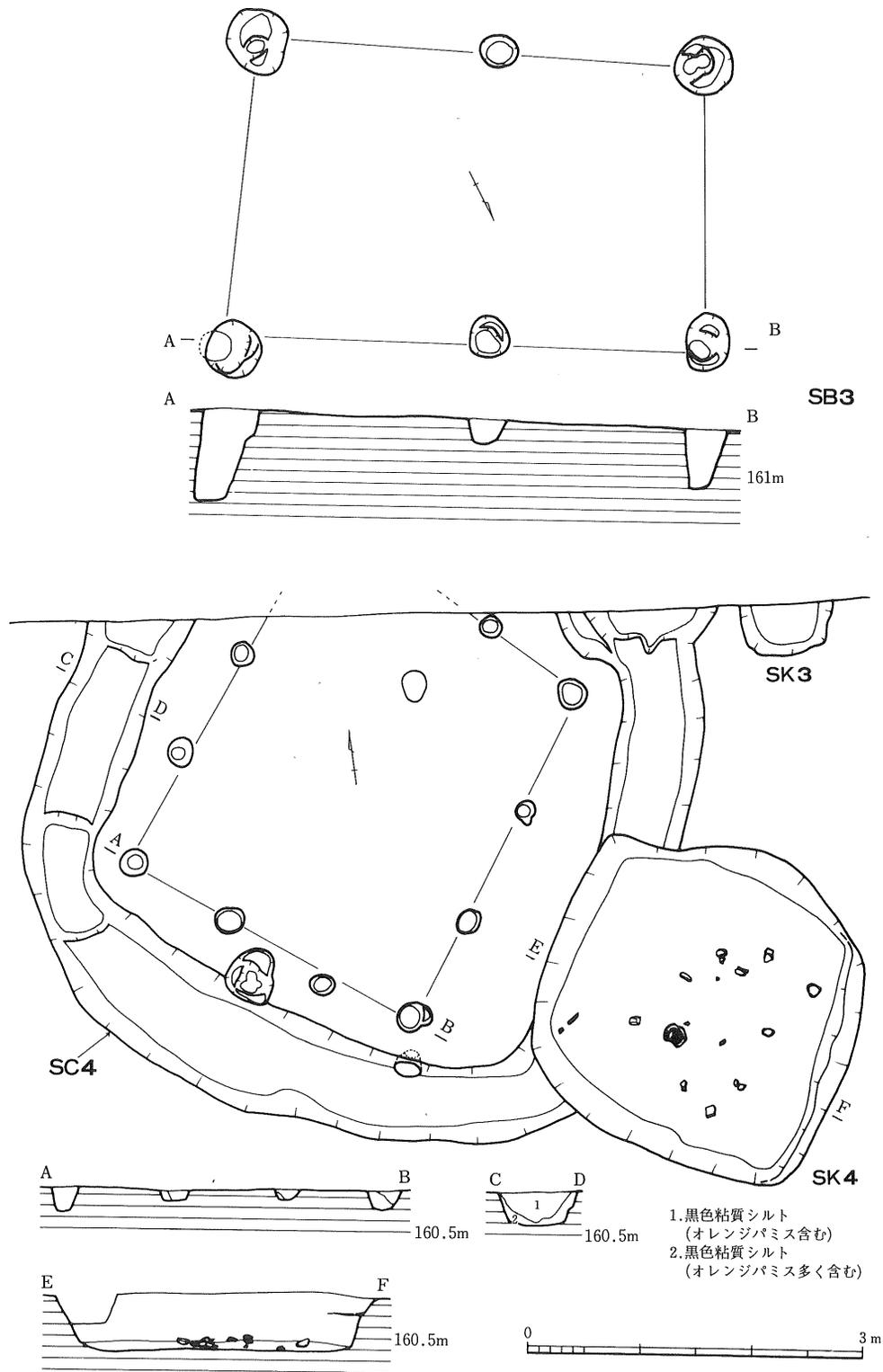
溝をめぐるせるという遺構を一括した。形態から、以下の3つに分類できる。

1. 他の遺跡でも一般的にみられる隅丸方形に溝をめぐるせるSC1・4・5
2. 平面プランが不定形で溝の幅が狭いSC2・3
3. 平面プランが「C」字状を呈する小規模のSC6・7・8（第6図）

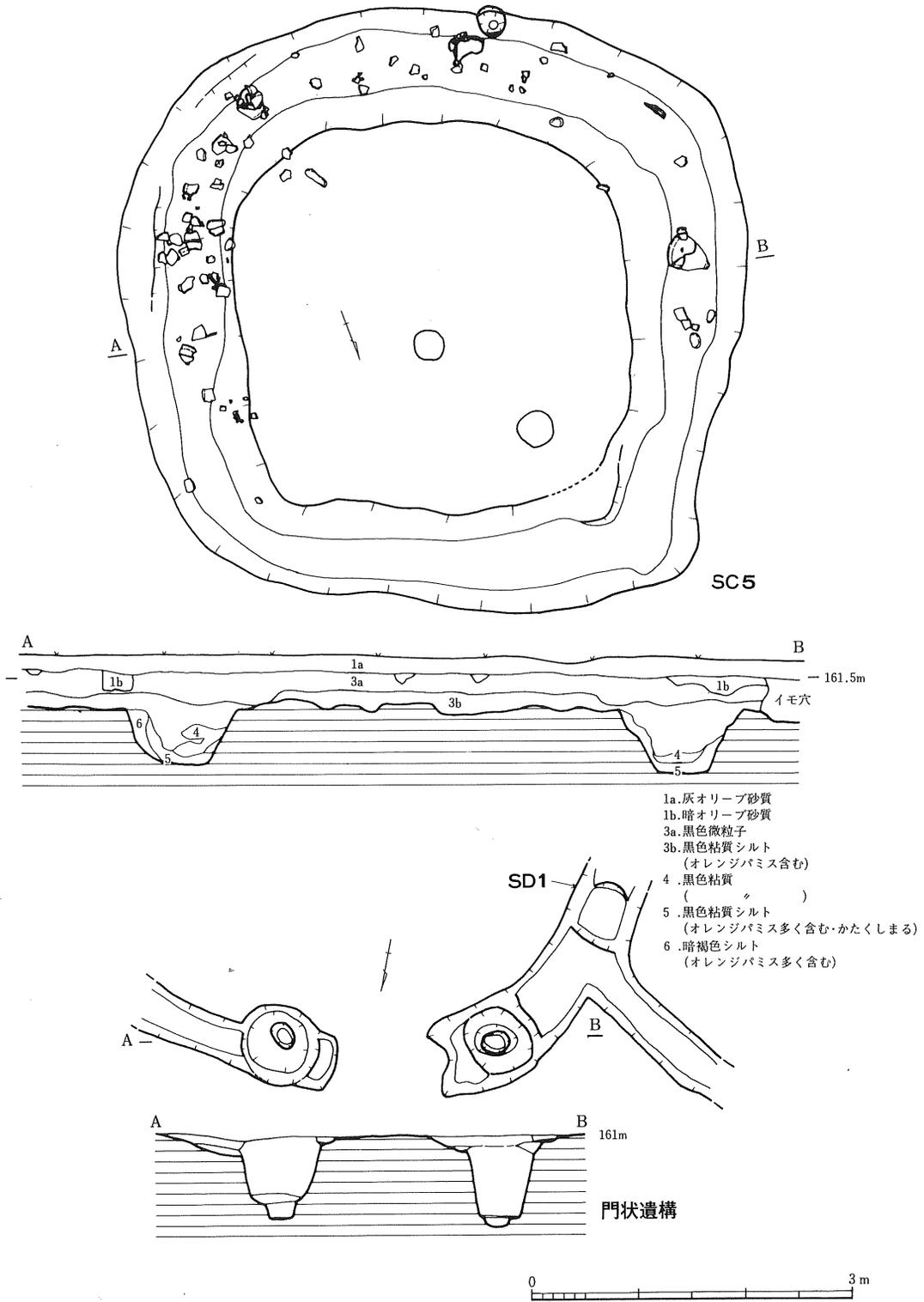
SC2（第6図）とSC4（第4図）は、溝の内側の台状部に柱穴が検出されている。後者のものは棟持柱を伴う可能性があり、3間×3間（柱間約90cm）の南北棟の建物が推定される。



第3図 向原第1遺跡C・D-3区遺構平面図



第4図 向原第1遺跡検出遺構実測図(1)



第5図 向原第1遺跡検出遺構実測図(2)

SC5は幅50～80cmの溝状遺構に二重に囲まれている(南側は調査区外のため不明)。その一番北側の溝は1m程度が掘り残され、陸橋をつくり出し、その両脇に門跡と推定される直径約60cmの柱穴を伴う(第3・5図)。SC1とSC5の溝内からは多量の土器の出土がみられた。

#### 〈土 坑〉

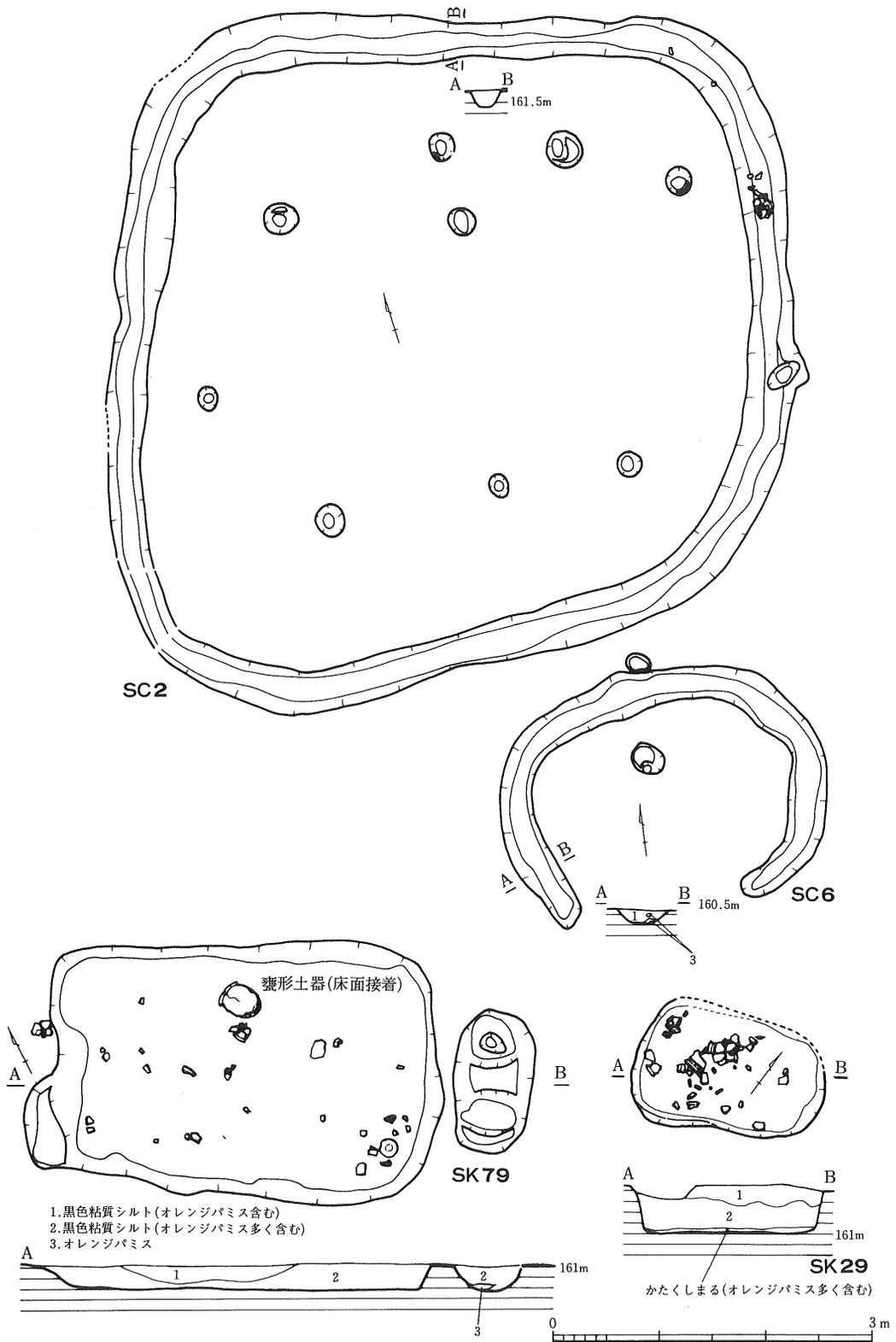
周溝状遺構SC4を切る隅丸方形プランのSK4(第4図)からは炭化米が検出された。また、SK29(第6図)内部からは多量の炭化材と土器片が検出された(第6図)。SK79とSK80とは近接し、長軸の方向が一致している。両者とも長方形プランの土坑に楕円形の土坑が伴うもので、規模もほぼ同じである。SK79は床面に完形の甕形土器1個が残されており(第6図)、SK80は床面接着の遺物は見られなかったものの、廃絶後の埋まりかけた段階に多量に土器片が廃棄された状態が観察された。

#### (3) 弥生時代の遺物

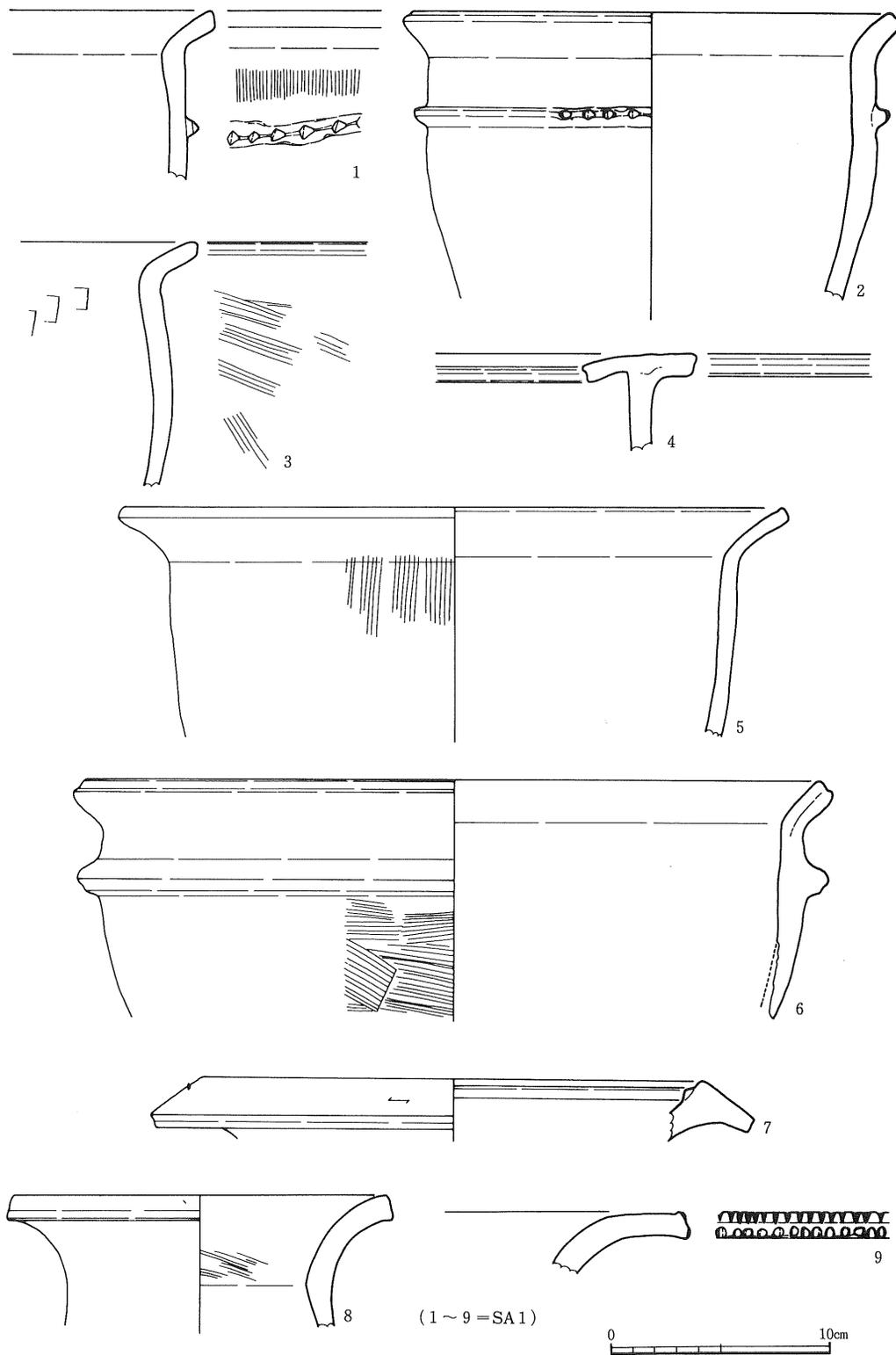
遺物は上記の遺構および3b層から、土器・石器(台石、砥石)・炭化物・鉄滓が出土している。土器には、甕・壺・鉢などが見られるが、高環や器台は認められない。甕は口縁部が「く」の字に外反し、底部は上げ底気味のもものが大半を占め、これには、頸部下に刻み目突帯をもつもの(いわゆる中溝式の甕に該当)ともたないものがある。さらに中～大型のいわゆる鐙状突帯をもつ甕が少量見られる。一方、SA1から、口縁部がやや立ち上がる逆「L」字状を呈し、胴部に断面「M」字状の突帯を2条めぐらせ、その胎土に金ウンモの認められる精製の甕(第8図10)が1個体だけ出土しているが、SC5から出土した小型の精製鉢(第11図30)にも胎土に金ウンモが認められた。壺には口縁部が垂れ下がり気味の逆「L」字形で、その内面に三角突帯をめぐらせるもの、口縁部直下に1条の突帯をめぐらせ、口縁部断面形態が2叉状を呈するものや、口縁部が極端に外反し、口唇部に刻目をもつものなどがある。なお、下城式の甕や瀬戸内系の土器は確認されていない。

#### (4) 小 結

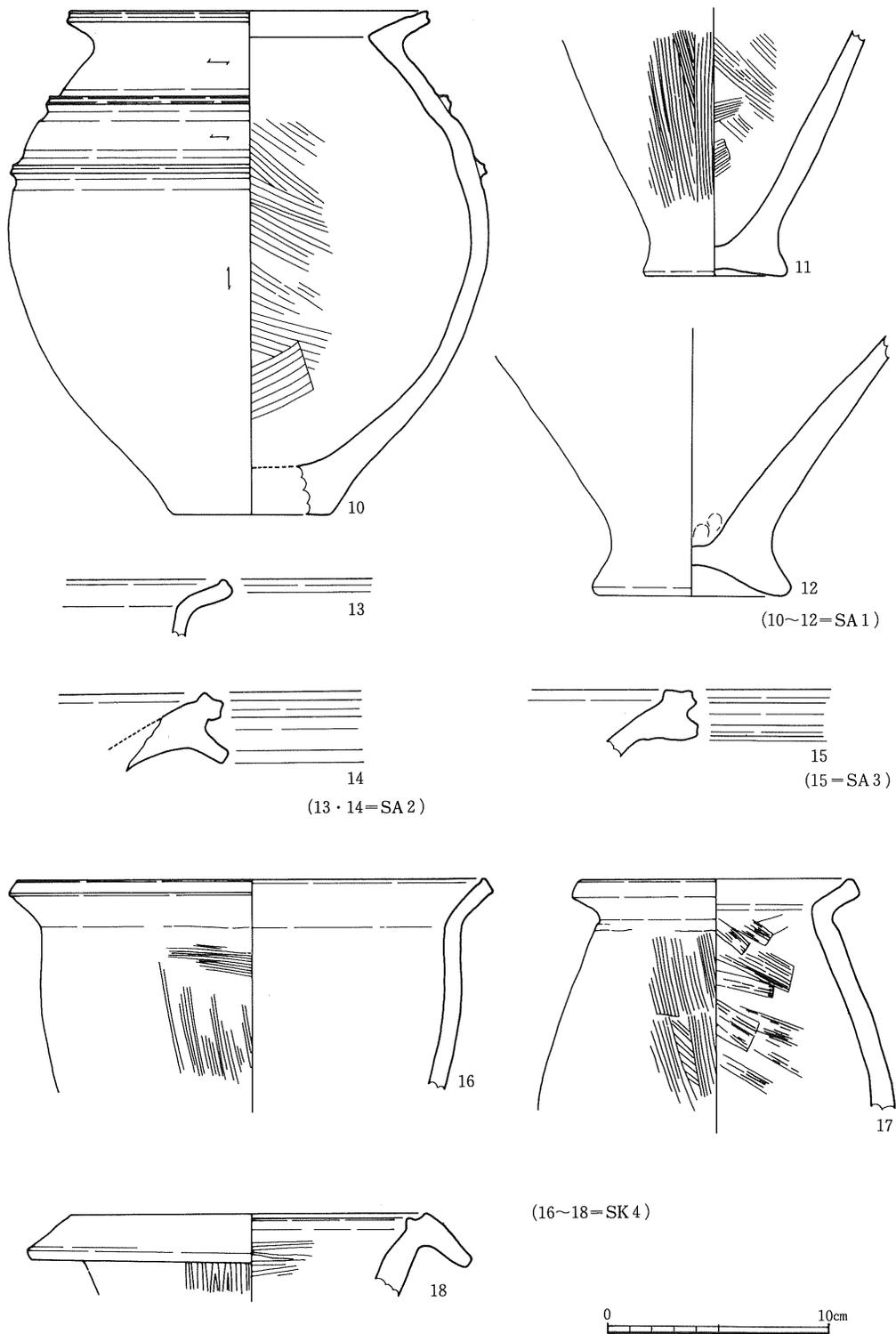
今回の調査は限られた面積の調査ではあったが、調査区が分散していたため偶然にも弥生時代の集落の範囲を推定することができた。(小谷によって開析された段丘東端の標高162mのコンターラインに沿った、南北約250m・東西約100mの南北に細長くのびる範囲)また、これまで都城盆地における当該期(中溝式期)の資料は、丸谷第2遺跡のもののみと稀薄なものであったが、その時期を埋める好資料となったばかりでなく、検出された各種の遺構や遺物は、当時の集落の諸施設や生産活動を考察する上でも非常に重要である。今後、より詳細な遺物・遺構群の時間的位置付けや分析・検討を進めていきたい。



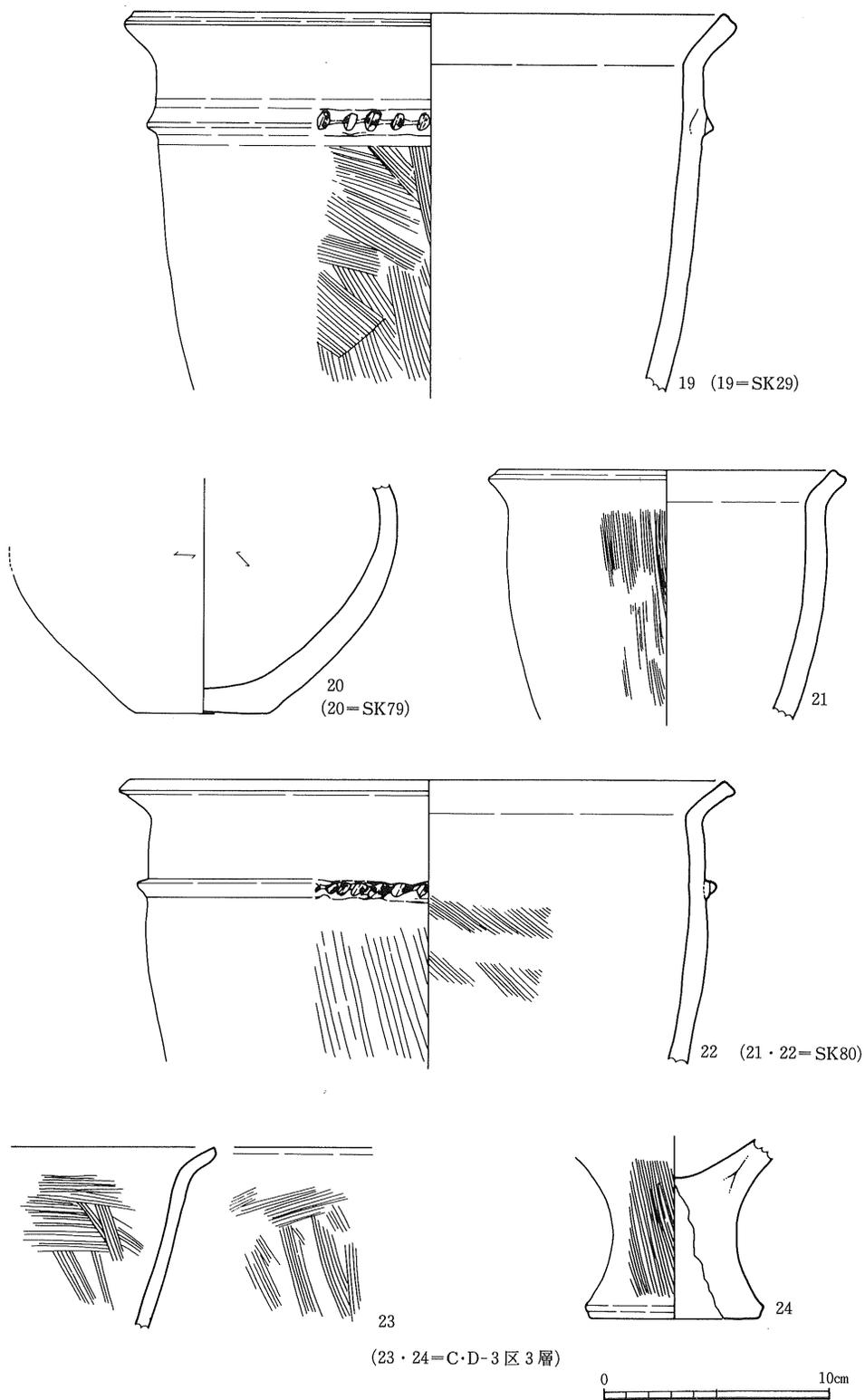
第6図 向原第1遺跡検出遺構実測図(3)



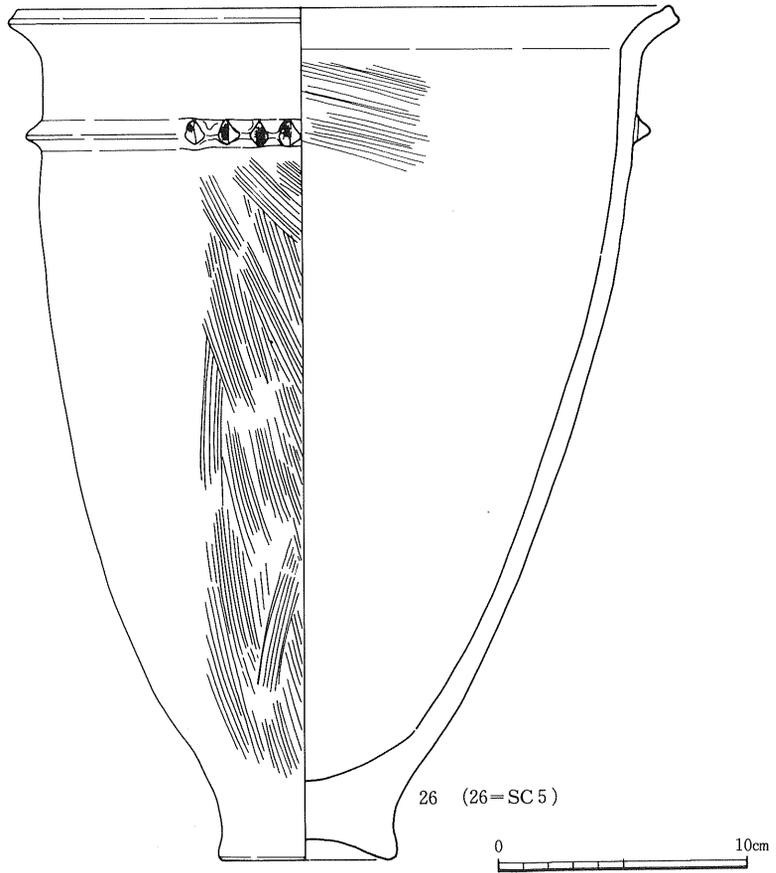
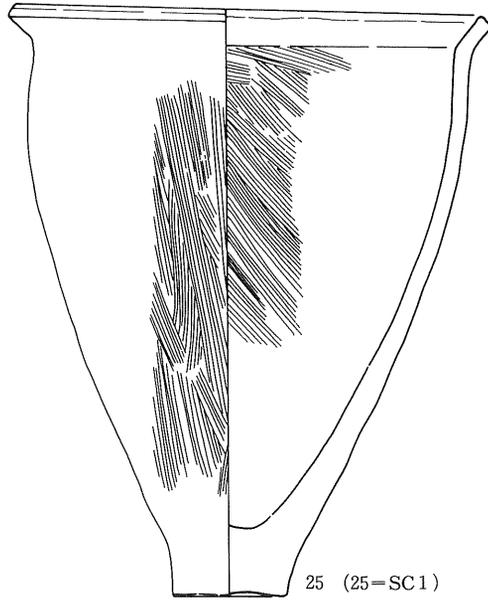
第7图 向原第1遺跡出土遺物実測図(1)



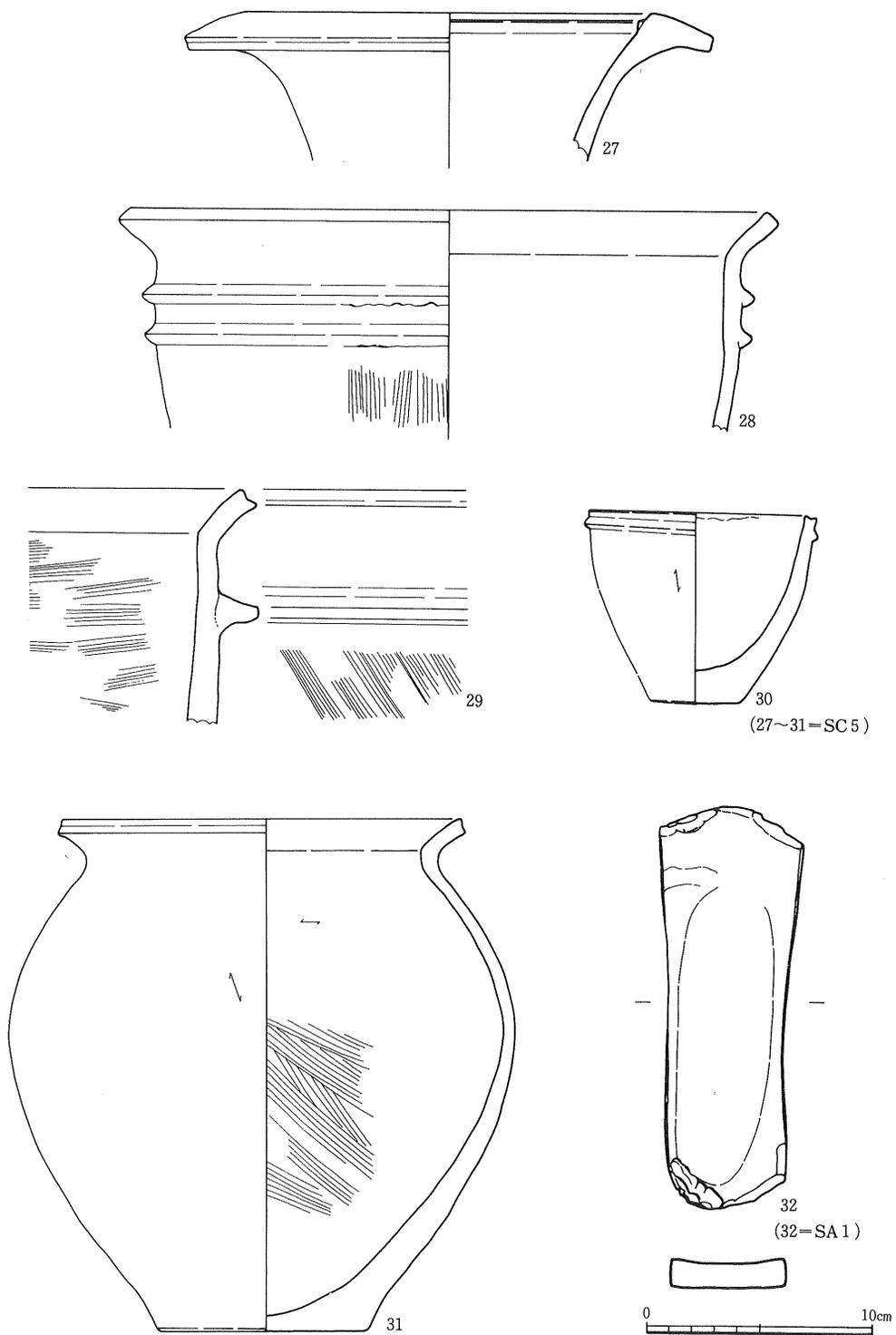
第 8 图 向原第 1 遺跡出土遺物実測図(2)



第9図 向原第1遺跡出土遺物実測図(3)



第10図 向原第1遺跡出土遺物実測図(4)



第11図 向原第1遺跡出土遺物実測図(5)

### 3. 向原第2遺跡の調査

#### (1) 調査の概要

道路付設予定地の約2,100㎡の発掘調査を平成元年11月から12月まで実施した。本遺跡の北西部の小谷は湧水点であり、そこでは現在、養魚場が営まれている(第12図)。

出土遺物の所属時期は縄文時代、弥生時代、近世であるが、主体となるのは弥生時代である。各時期ごとの概要は以下のとおりである。

#### 縄文時代

3b層から後期に位置付けられる深鉢形土器数片と石鏃1点が出土している。

#### 弥生時代

竪穴住居跡4、掘立柱建物跡3、土坑7、溝状遺構1が検出された。これらの遺構中と3層から土器、石器、鉄製品、炭化材などが出土している。

#### 近世

1b層から陶磁器が出土している。また、1b層下部で道路跡が検出された。

上記のほかに、調査区東側で中世以前に存在していたと推定される凹地1か所と局部断層が3地点で検出された(第12図)。

#### (2) 弥生時代の遺構

##### 〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は4基検出されているが、ほとんどが北側の調査区外へ入り込むため、全面調査を行ったのはSA2の1基だけである。SA1とSA3は方形プランを呈するものと推定され、調査範囲内で前者は2か所、後者は1か所の突出壁をみる。SA2は7×7.7mのゆがんだ方形プランを呈し、6か所に突出壁をもつ。炉と思われる中央の土坑には台石が据えてあった(第14図)。どの住居跡も壁ぎわに円形あるいは楕円形の土坑を伴っており、SA1の各壁面の中央に位置するものについては柱穴とも考えられる(第13図)。

##### 〈掘立柱建物跡〉

SB1は1間×1間(第13図)、SB3は2間×2間の建物である。

##### 〈土坑〉

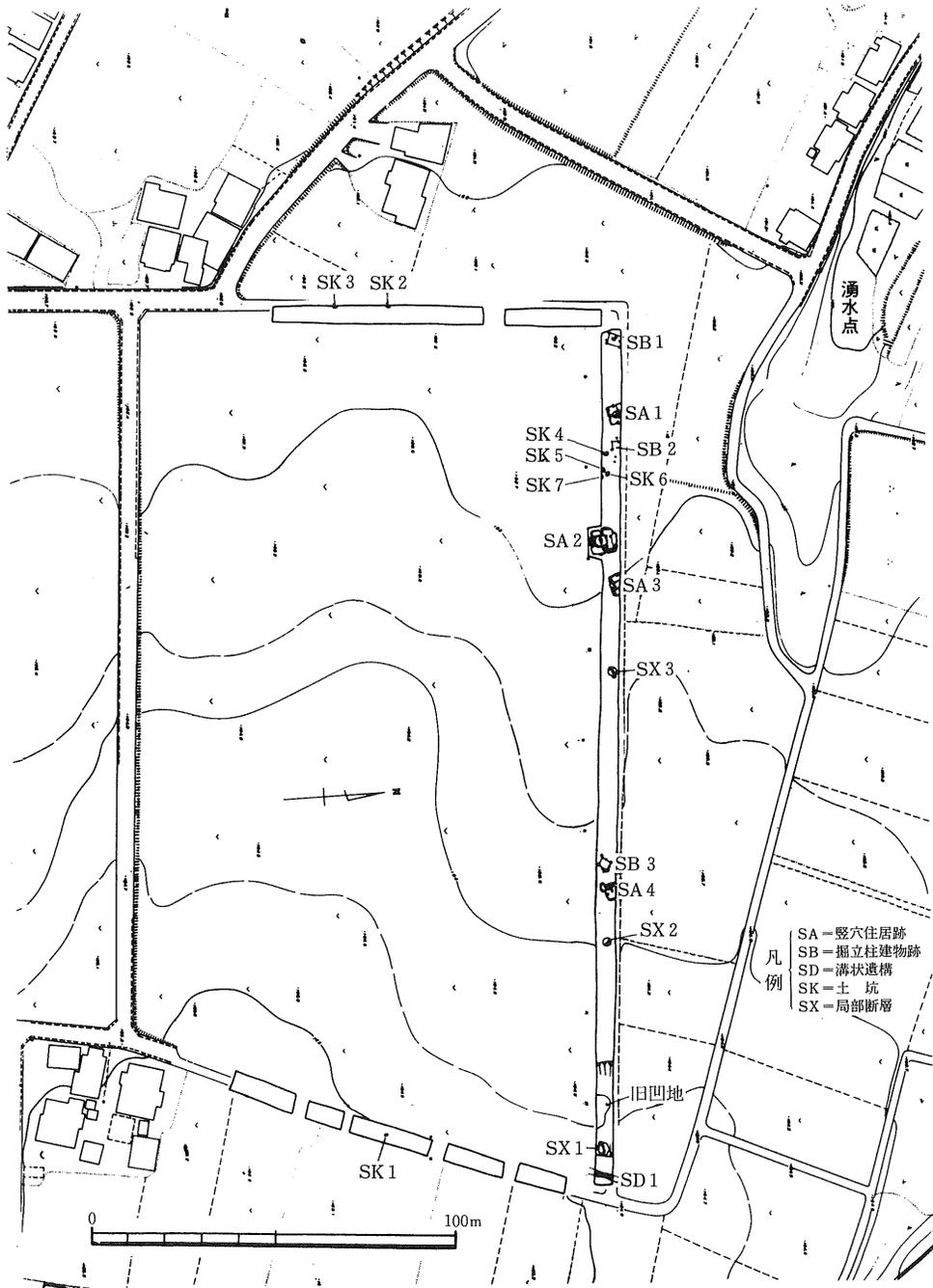
SK1は長軸1m、短軸0.5mの瓢箪形を呈し、検出面からの深度は約6cmである。多量の炭化材の出土がみられた。SK3は長径約1mの楕円形プランで、床面中央に径28cm、深度約40cmのピットを伴っている。その内部から、甕形土器数個体がおり重なった状態で検出された。

##### 〈溝状遺構〉

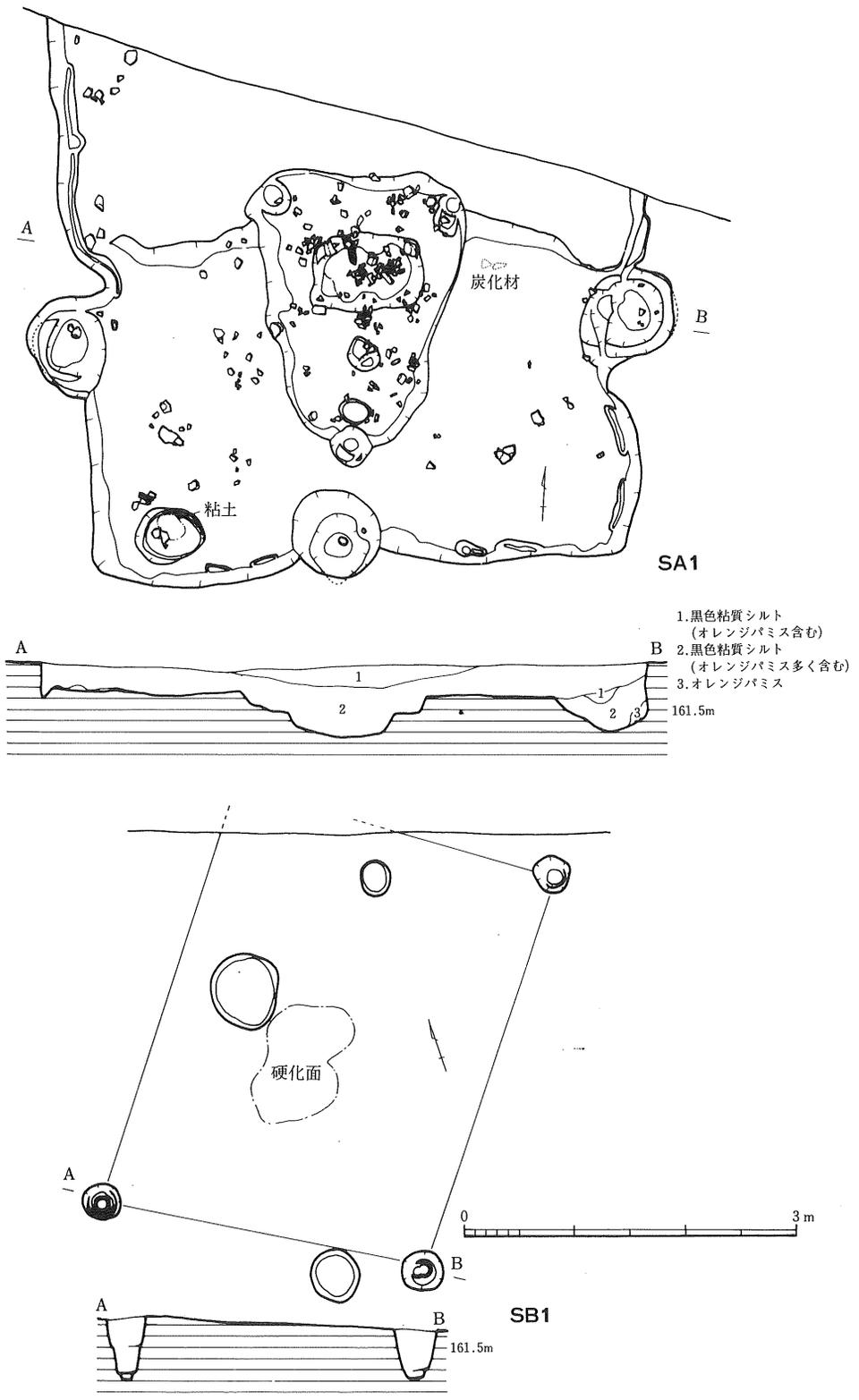
調査区の東端で、南北方向に走行するSD1が検出されている(第12図)。幅1～1.4m、検出面からの深度は45cmで、断面形は逆台形である。

#### (3) 弥生時代の遺物

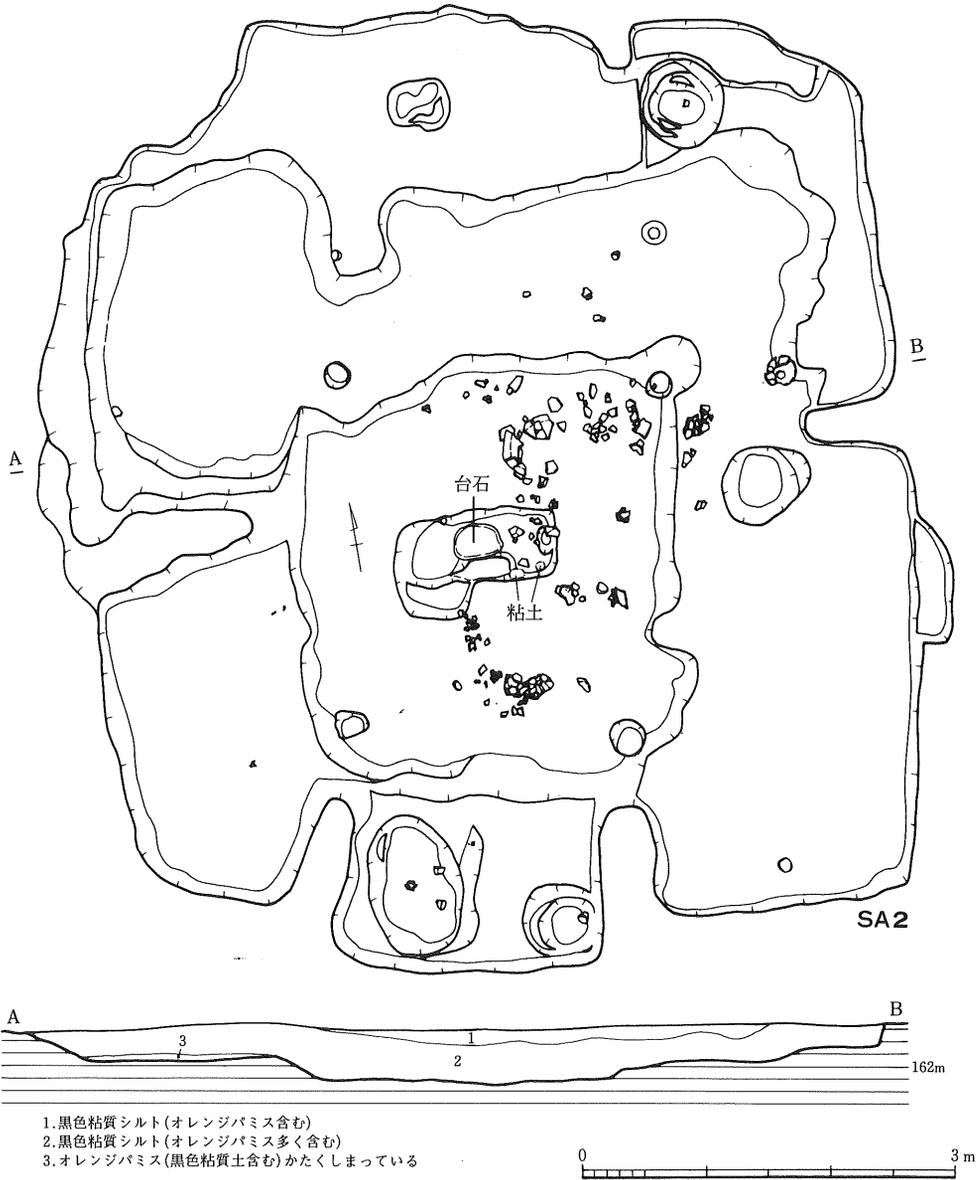
出土土器の大半は、竪穴住居跡から出土している。特に、SA1、SA2、SA3の覆土中からは完形品を含む多量の土器が検出された。その形式には、甕、壺、高坏、器台、鉢、蓋、ミニ



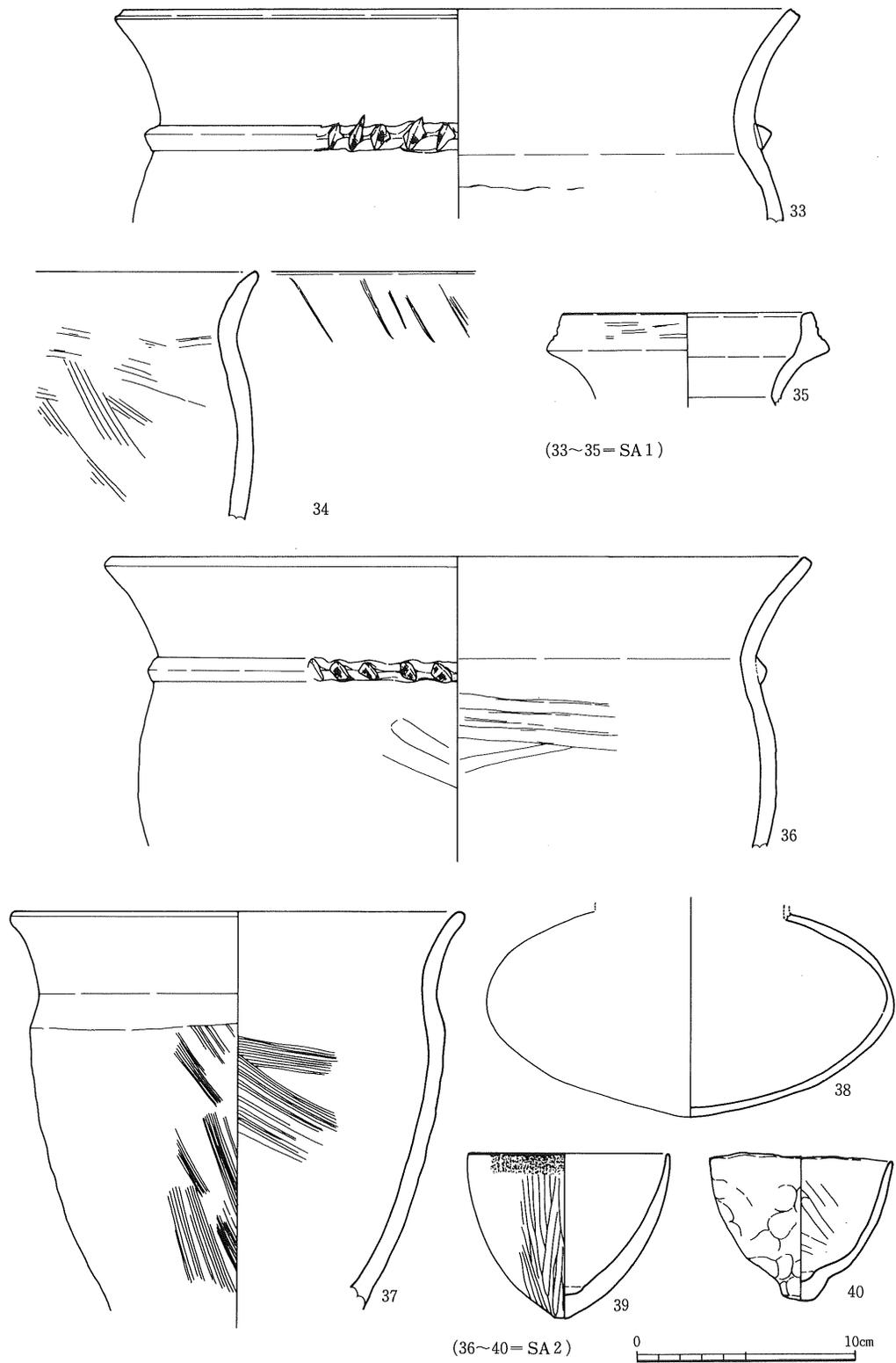
第12図 向原第2遺跡遺構配置図



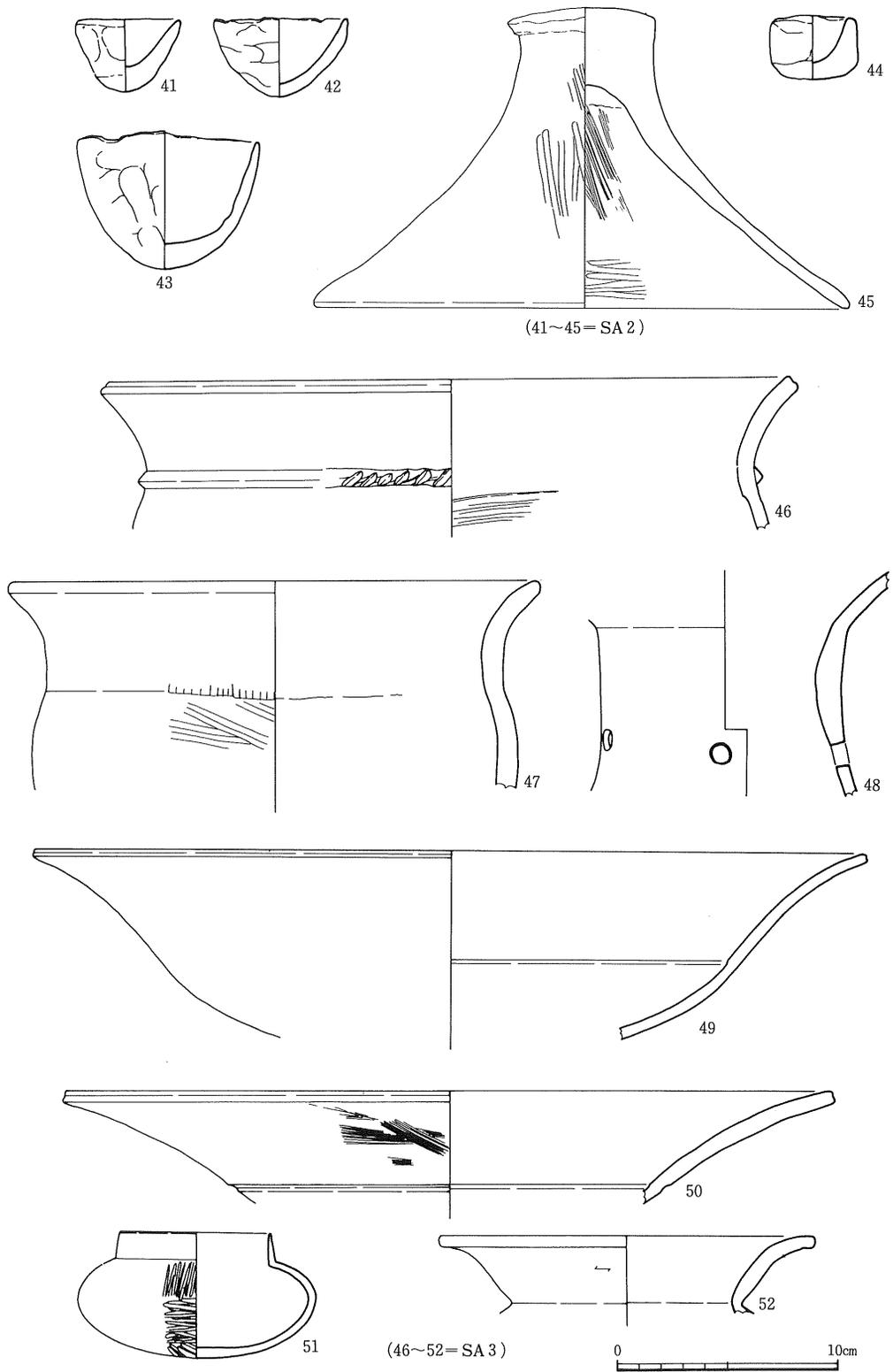
第13図 向原第2遺跡検出遺構実測図(1)



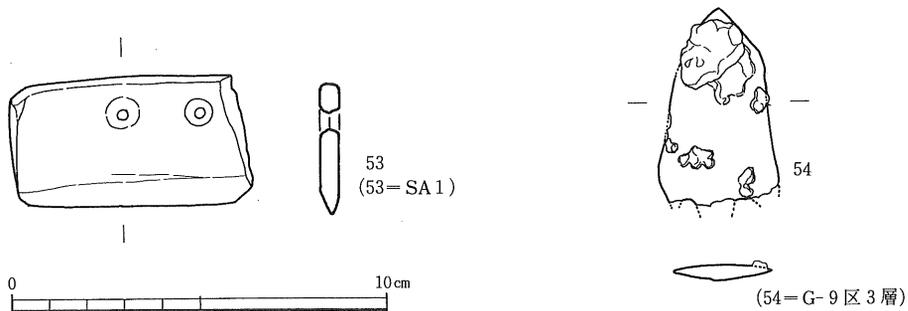
第14図 向原第2遺跡検出遺構実測図(2)



第15図 向原第2遺跡出土遺物実測図(1)



第16图 向原第2遺跡出土遺物実測図(2)



第17図 向原第2遺跡出土遺物実測図(3)

チュア土器などがある。甕は頸部がしまり、口縁部が外反するもので、刻目突帯をもつものもたないものの2者がある。底部には低い脚台がつく。刻目突帯をもたない甕には、口縁部にハケによるカキ上げを行ったのち、強いヨコナデを施しているものがみられる(第16図47)。壺は概して出土量が少ない。SA1から複合口縁壺の破片が1点出土している(第15図35)。小型壺には胴部がつぶれた球形を呈し、直立する短い口縁部をもつものがある(第16図51)。高環も出土点数は少ない。その形態は口縁部が大きく外反するもので、環部外面に凹線を施すもの(第16図50)などがある。器台はSA3から円形の透かしをもつものが1点出土している(第16図48)。鉢には精製と粗製の2者が認められ、前者には口縁部外面にクシ描き波状文を施したものがあ(第15図39)。第16図45は蓋であり、内面外縁にススの付着が認められる。

出土した石器には、台石、砥石、石庖丁があり、石庖丁はいずれも方形で刃部は片刃である。鉄製品はSA2と3層中からそれぞれ1点ずつ出土している。54は鉄鏃と思われる。

#### (4) 小 結

集落については、限られた調査範囲のために断定的なことは言えないものの、竪穴住居跡は調査区西側に集中し、居住区域がより湧水点に近いところに設定されていた状況が認められた。一方、調査区東端で検出された南北に走る溝(SD1)は集落の東限に位置するものと推定される。

本遺跡の土器相は、都城盆地において、弥生時代終末期に位置付けられている祝吉第2遺跡、丸谷第1遺跡、加治屋遺跡と比較した場合、甕には刻目突帯をもつものが存在する点、クシ描き波状文を施す複合口縁壺がほとんど見られない点、高環の環部形態が異なる点などが指摘できる。現時点ではこれらの資料間の差異を本遺跡のものが時間的に後出するためと解釈しておくが、今後、詳細な分析と検討が必要であろう。

#### 〈参考文献〉

- 『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979
- 『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第1集 都城市教育委員会 1980
- 『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第2集 都城市教育委員会 1981
- 石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館 1968

VI 竹山・胡麻ヶ野地区  
試掘調査

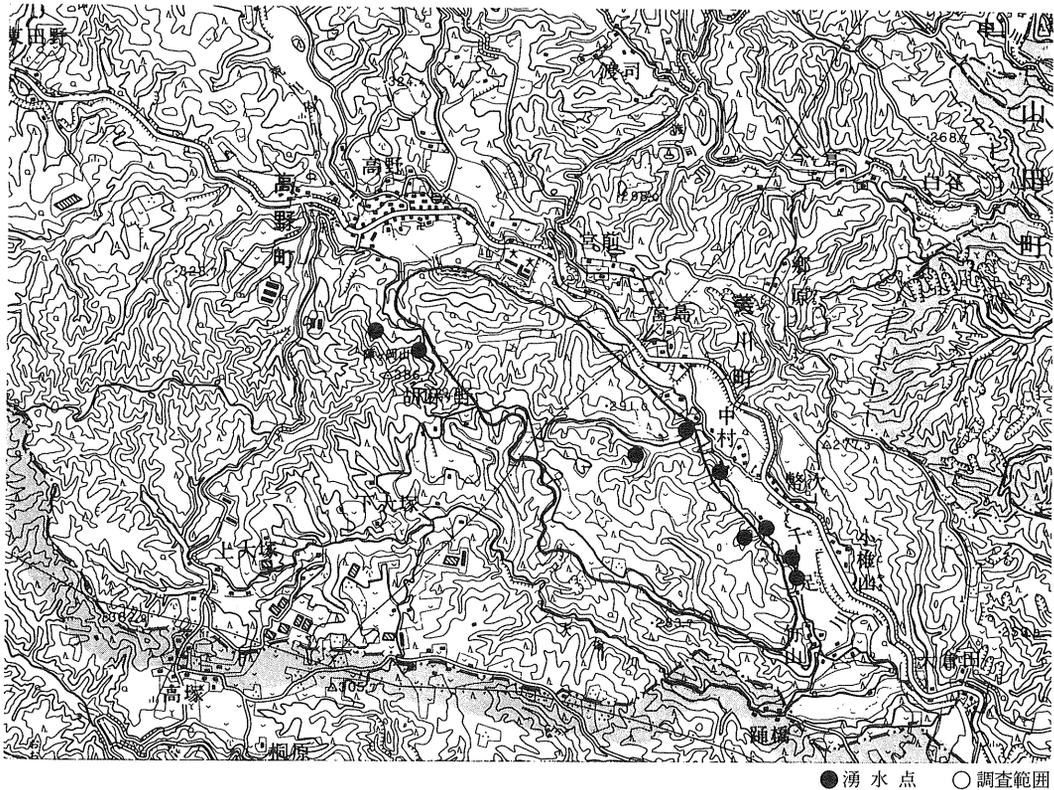
## 1. 位置と地形的環境

竹山・胡麻ヶ野は都城市美川町に所在する。(第1図)

都城市街地から県道都城霧島公園線で霧島方面に約15km、庄内川とその支流である大塚川に挟まれ、霧島より南東にのびる霧島山系の一つ標高300mほどに位置している。

試掘対象地域は山地であり、現況は山腹を中心に人工林(杉林)が主で、その他山上付近で畑地、谷間で水田が営まれている。

次に、都城盆地の地質は火山噴出物が累積し層をなしており、これらは各時代の中で鍵層となっている。下層から入戸火砕流(シラス)、サツマ、カシワパン(霧島系)、幸屋火砕流(アカホヤ)、御池ボラ、文明の軽石等が堆積している。特に御池ボラは、現在の御池御鉢(カルデラ湖)より噴出したもので、都城盆地の外は田野町、鹿児島県の財部町・末吉町の一部の極狭い範囲に降下した軽石である。厚さは市街地で1m前後で、御池に近づくにつれてその厚さを増している。今回の調査範囲では平坦面で2~3m、傾斜地で4mに達している。このため試掘調査で縄文時代中期以前の遺跡を確認することは物理的に大変な労力を必要とする。



第1図 試掘調査対象区域図(1/50,000)

## 2. 調査の内容

調査は現況の畑地を中心にトレンチ法を用い、合計28ヶ所にトレンチ（基盤面で2×3mの規模）を設定した。便宜上、調査対象区域を第1から第6地区に区分した。地表面からアカホヤ層までは重機により掘り下げ、それより基盤面の二次シラスまで手掘りで行った。基本層序は第Ⅰ層耕作土・第Ⅱ層御池ボラ・第Ⅲ層淡褐色シルト・第Ⅳ層アカホヤ・第Ⅴ層青灰色砂質土(カシワバン)・第Ⅵ層灰褐色粘・硬質シルト・第Ⅶ層黒褐色弱粘質シルト・第Ⅷ層明褐色シルト(サツマ)・第Ⅸ層暗赤褐色粘質シルト・第Ⅹ層淡黄褐色シルト(二次シラス)である。

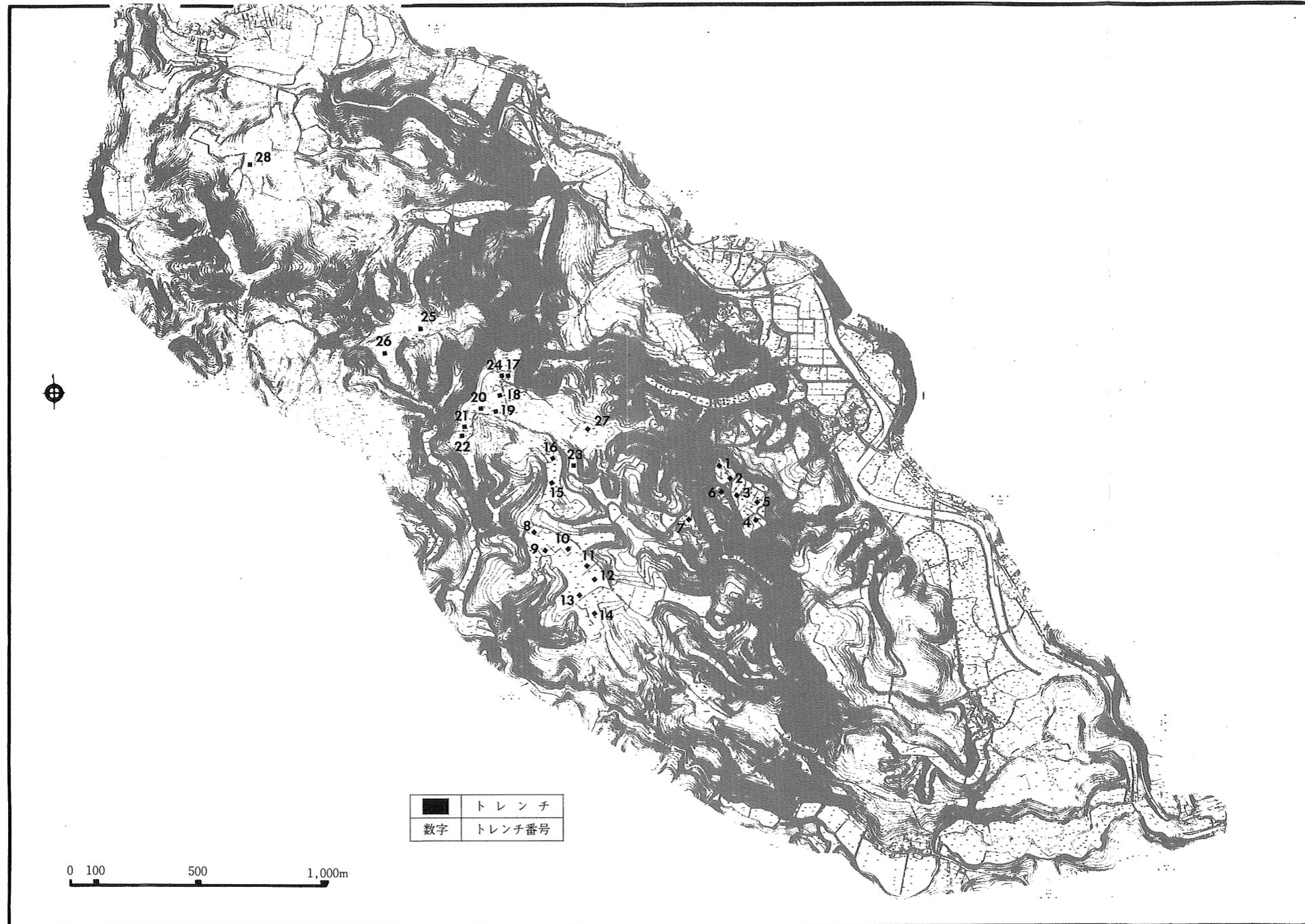
### (1) 第1地区〔1～7トレンチ〕(第3図)

胡麻ヶ野地区北側の畑地約3.5haに7ヶ所のトレンチを設けた。1～5トレンチにおいて、各層の厚さは大体等しく、アカホヤ層下での遺物の出土はなかった。1トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きはほぼ水平であるが、南北方向では緩やかに南傾している。2トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きは南北方向は北傾きみで、東西方向は緩やかに東傾している。3トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きは南北方向は北傾し、東西方向はほぼ水平である。4トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きは南北方向はほぼ水平で、東西方向は東傾きみで、第Ⅴ層から角礫が出土している。5トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きは南北・東西方向ともほぼ水平である。また、第Ⅰ層の落込みを御池ボラで確認した。6トレンチは基準点から高低差7mほどの段差があり、現地表面は東側谷に向かってなだらかに傾斜している。試掘の結果では各層ともかなりの厚さに堆積しているため、現地形よりも急傾斜だったことが伺える。第1地区畑地の御池ボラ層下では、現地形と同じく山上が平坦な台地状を呈していたと思われる。7トレンチは1～6トレンチとは一谷を挟んで位置している。土層は御池ボラ層が浅く、第Ⅶ層の黒褐色土の堆積がみられない。また、東西方向は水平であるが、南北方向は東側へ傾斜していることから、以前は頂上部付近であった可能性がある。他、第1地区では3・5・6トレンチの周囲の畑で土器片、明代の青磁碗(23)と白磁皿(切高台)や砥石を表採している。

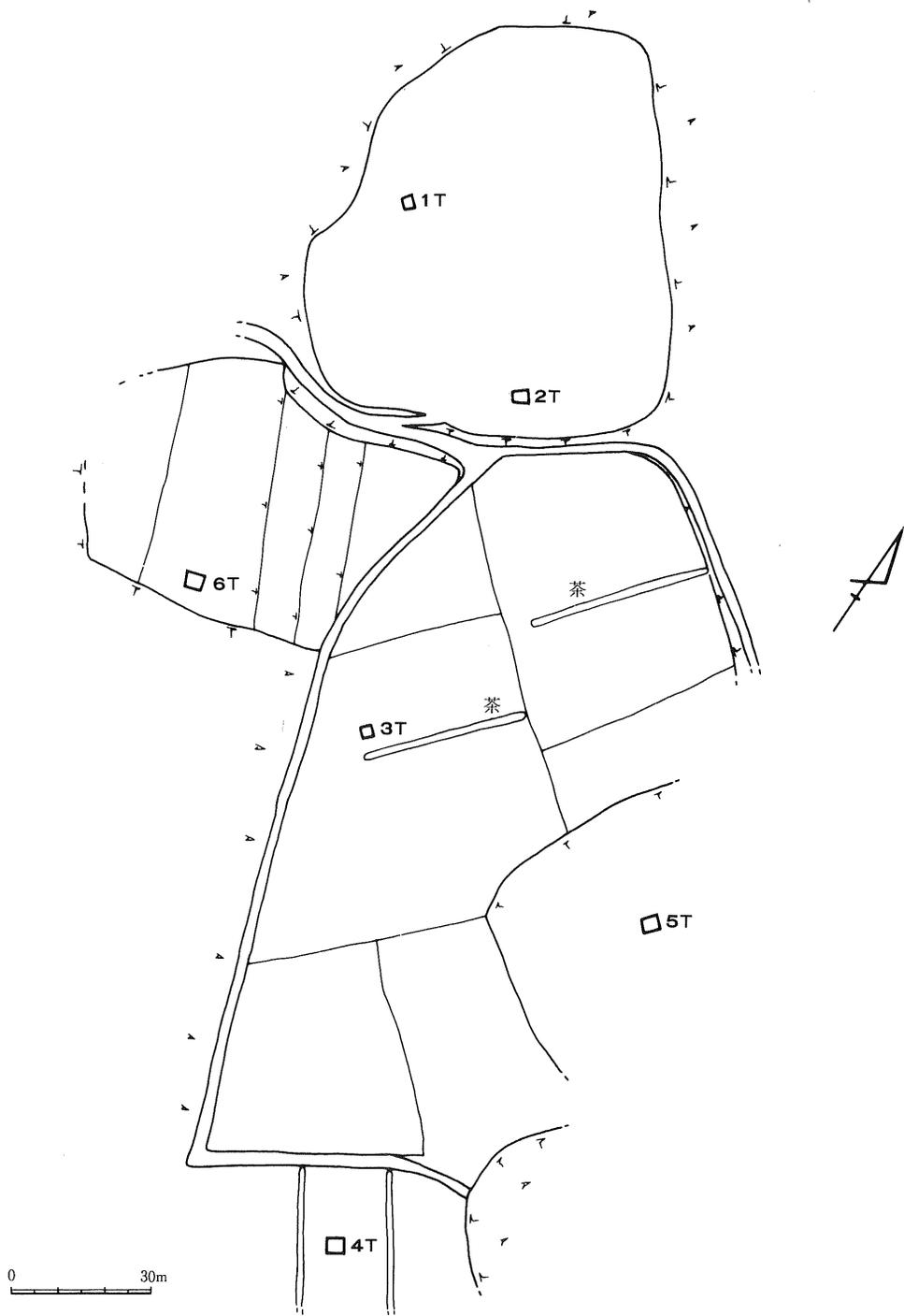
### (2) 第2地区〔8～14トレンチ〕(第5図)

竹山地区南側の畑地約6.5haで、7ヶ所にトレンチを設けた。8トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きは南北・東西方向ともほぼ水平である。第Ⅷ層のサツマの堆積もブロック状ではあるが、第1地区より堅固で、第Ⅵ～Ⅶ層上部で礫が出土する。第Ⅰ層は客土である。9トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きも南北・東西方向ほぼ水平である。第Ⅰ層は厚い(客土ではない)。10～14トレンチの御池ボラ層下の土層の傾きも南北・東西方向ほぼ水平である。10トレンチでは第Ⅴ～Ⅶ層上部で礫が出土する。11トレンチではアカホヤの堆積状態が悪くブロック化している。西壁断面で第Ⅶ層埋土のピットを検出したが遺物の出土はない。12トレンチではサツマ直下から土器小片が出土した。14トレンチの西壁と南壁の西半分は第Ⅷ層のサツマを確認できなかった。第2地区畑地は南向きの台地であることから、遺跡の立地条件は十分備えている。他、第2地区で畑地の中央で土器片や滑石製の石鍋片等を表採した。

### (3) 第3地区〔15・16トレンチ〕(第7図)



第2図 トレンチ配置図

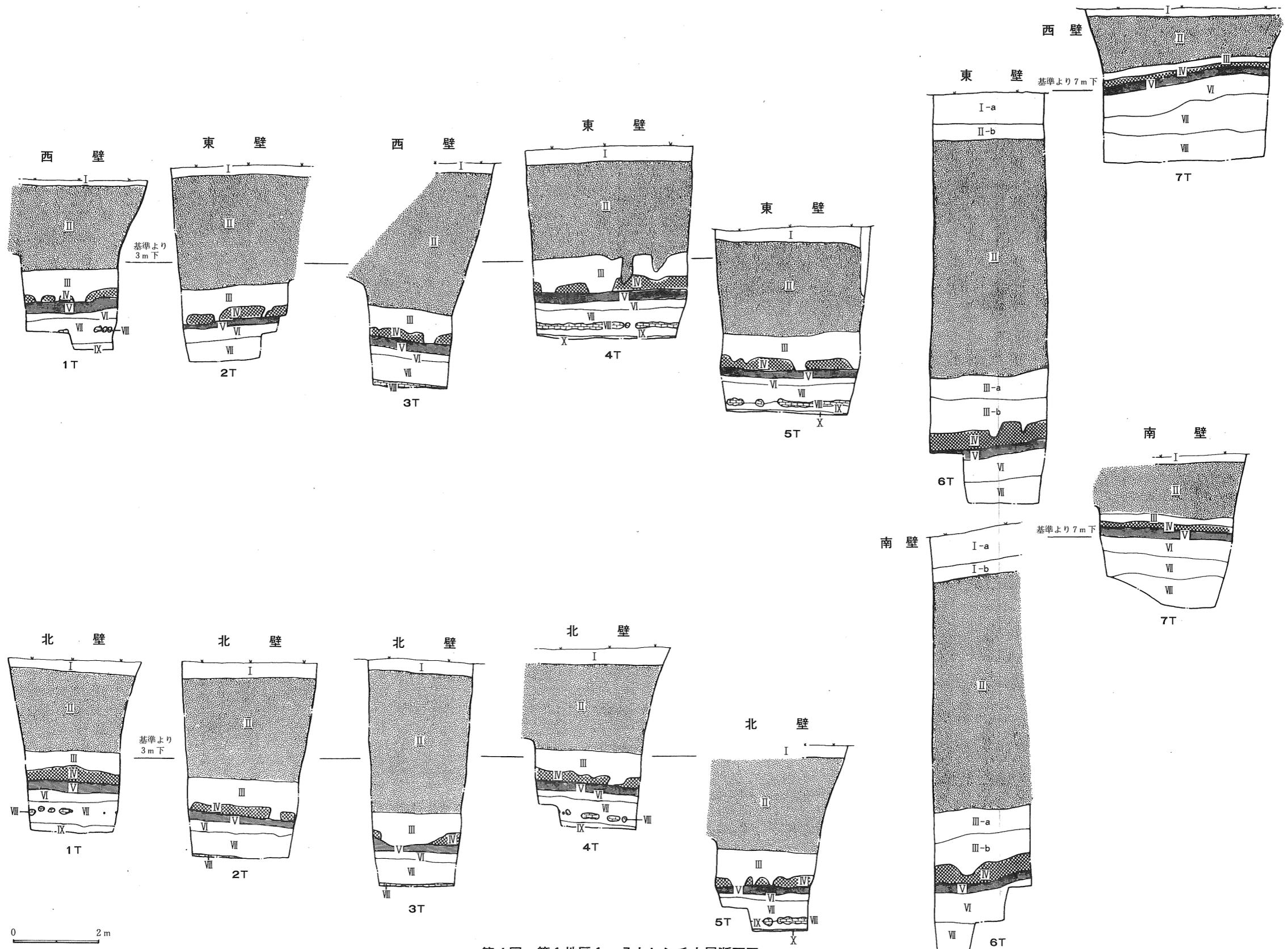


第3図 第1地区トレンチ配置図

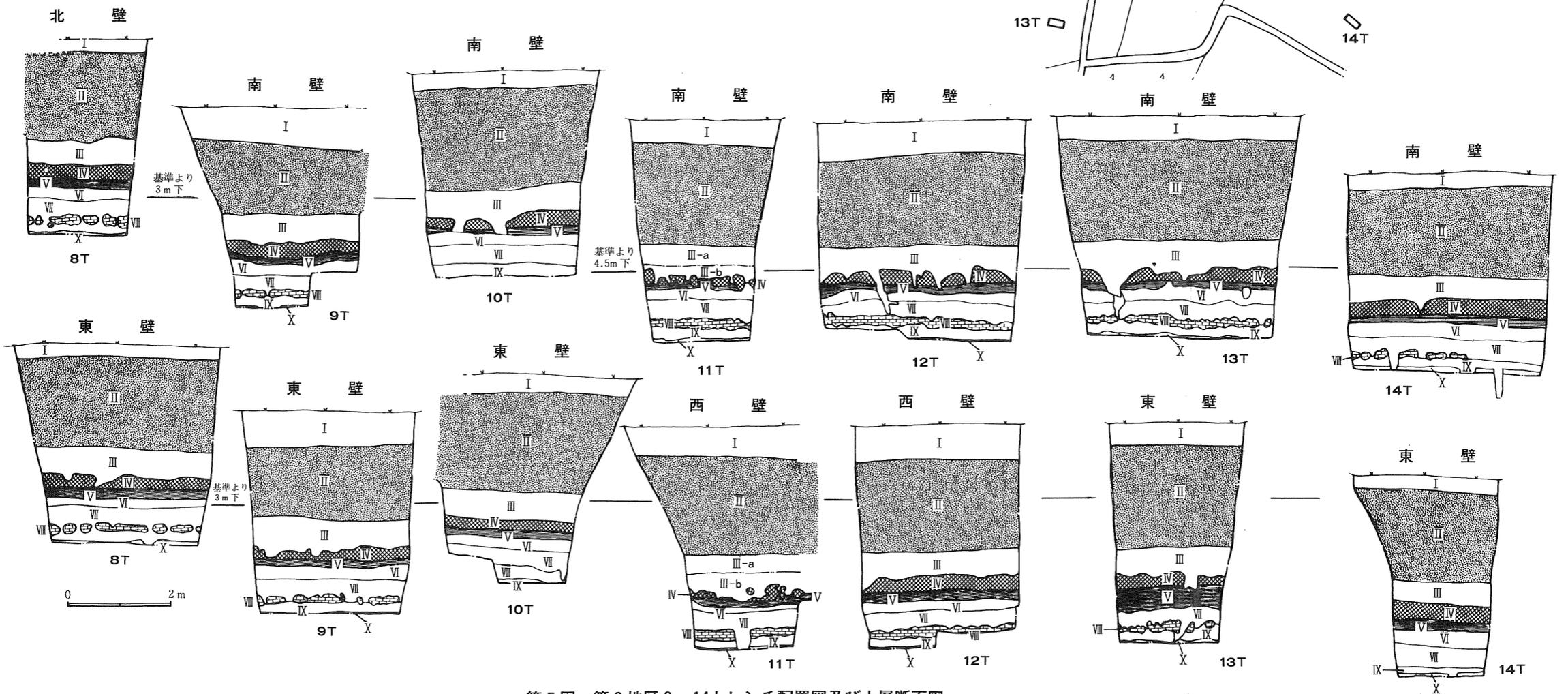
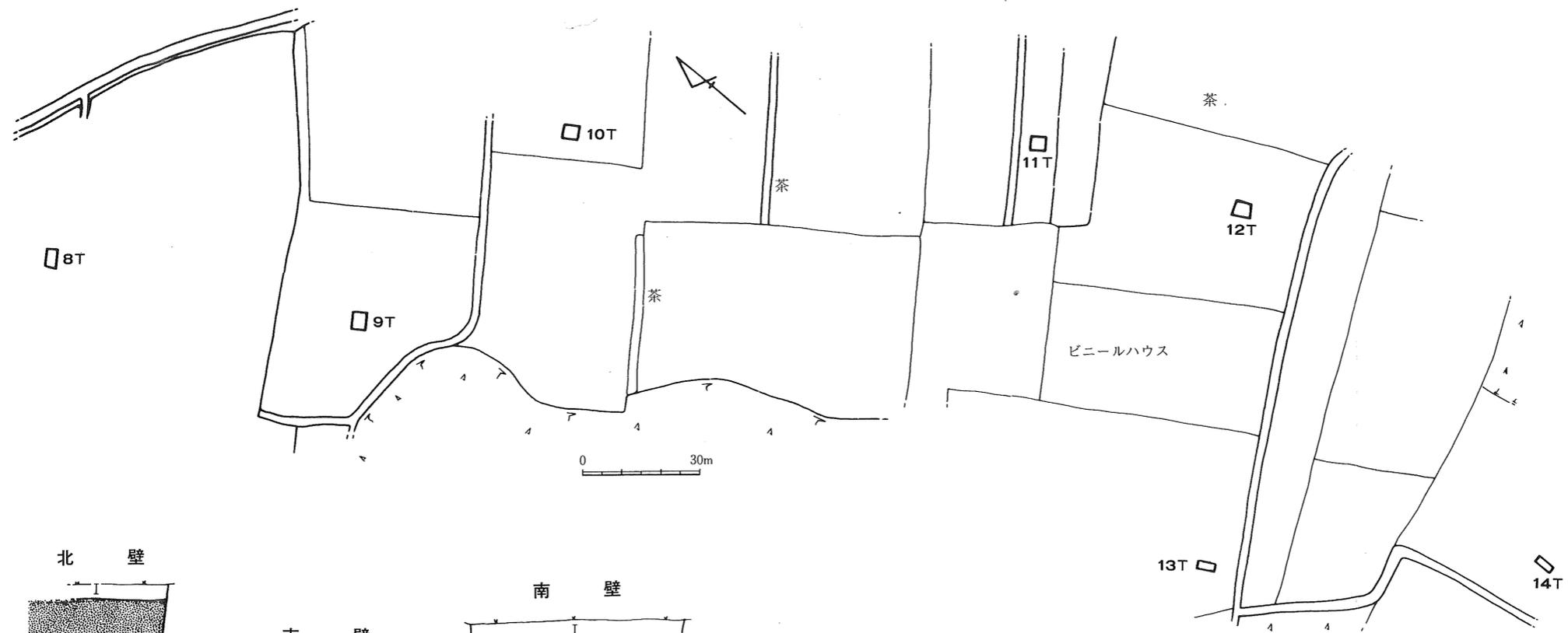
第1地区と第2地区を馬の背状に細長く結び、両脇とも谷に傾斜している。第15・16トレンチとも御池ボラ層下ではほぼ水平である。16トレンチでは第Ⅵ層よりする磨石(22)が出土している。23トレンチは北側谷間のため、流れ込みにより各層が厚く堆積している。第Ⅰ層が2mほどあり、地表面下約5mほど掘り進んだが御池ボラ層さえ完掘できなかった。

(4) 第4地区〔17～22・24・27トレンチ〕(第6・9図)

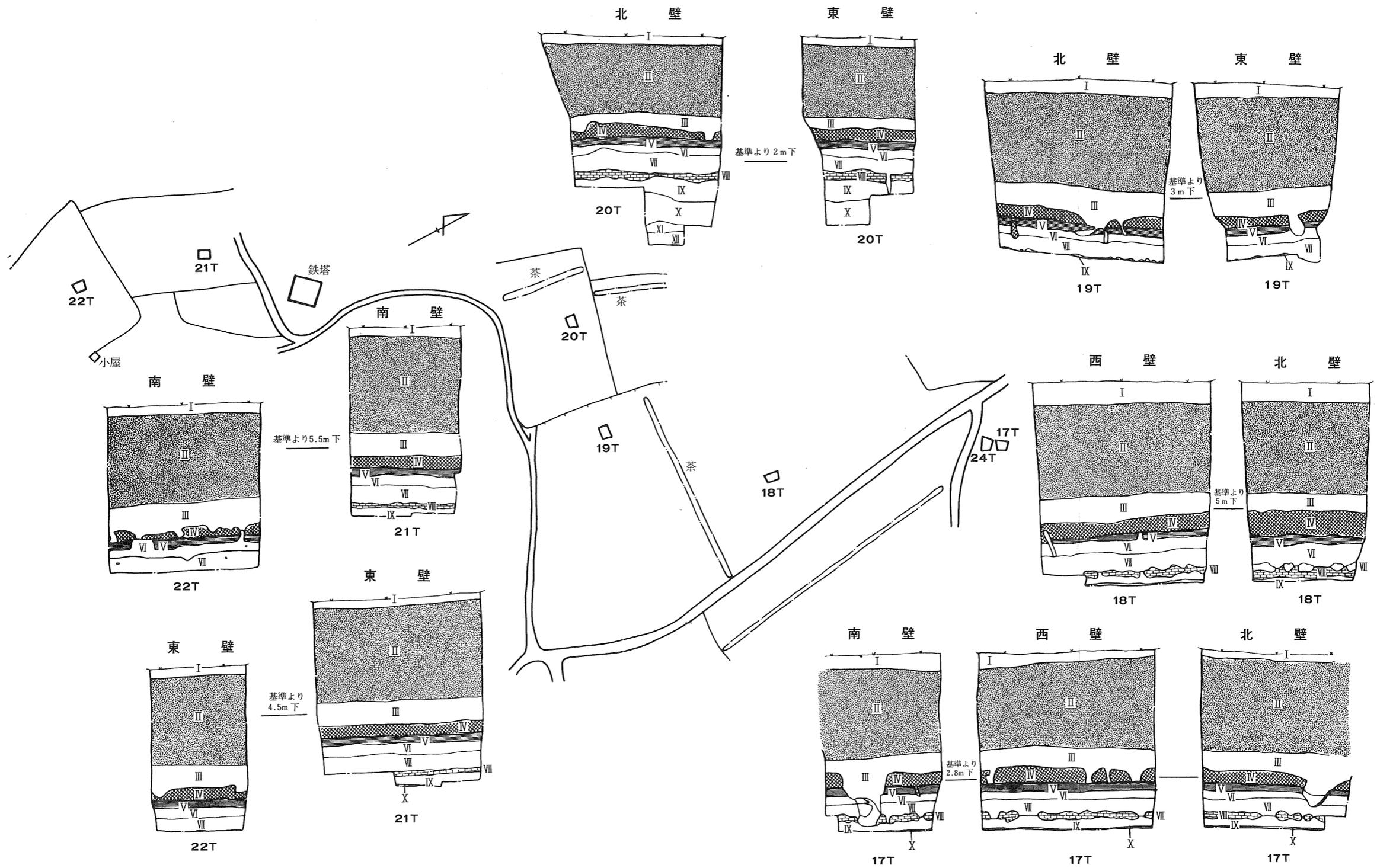
胡麻ヶ野地区南側畑地約4.5haで、8ヶ所にトレンチを設定した。17トレンチで第Ⅳアカホヤから第Ⅸ層上面の二次シラスまで達する第Ⅲ層埋土のU字形の溝状のな落込みを南北断面で把らえたが、遺物の出土はなかった。18・19トレンチでは第Ⅳ層下で遺物はないが、拳大以下の礫が出土した。20トレンチの御池ボラ層下での土層の傾きは南北・東西方向ともほぼ水平である。第Ⅴ層下部から第Ⅵ層にかけて土器(17)と礫が出土している。17は上下に2条に刻目付きの隆帯を有し、地文に楡歯状の工具で横方向に条痕を施している。21トレンチの御池ボラ層下での土層の傾きはほぼ水平で、第Ⅵ層最下部から土器が出土している。21は胴部片で現存では4条の凹線を巡らし、その下部はヘラ状工具で右から左へ斜めに連続して刺突する。22トレンチは、御池ボラ層下での土層の傾きは南北方向はほぼ水平、東西方向はやや東傾している。土器及び石は第Ⅴ層下部から第Ⅶ層にかけてかなり出土した。01は推定復元口径36.0cm、頸部から外反ぎみに立ち上がり、口縁部は断面三角形に肥厚する。口縁肥厚面は右下がり7条、左下がりが6条単位凹線を鋸歯状に施す。口縁下では竹管による刺突連点の間に5条の浅い凹線をラフに施す。器壁は脆弱で、胎土に金雲母を含む。第Ⅶ層出土である。02は胴部片で縦位に刻目突帯をもつ。03は胴部片で縦位に連点を打ち、両側に深めの凹線を引く。胎土に金雲母を含む。第Ⅶ層出土である。04は胴部片で縦位に刻目突帯をおき、両側は凹線と連点の組合わせである。05は胴部に縄文を施す。第Ⅴ層出土である。06は口縁部片で口唇部は刻目が、口縁部は押し引き状の刺突連点と凹曲線の組合わせである。07は口縁へ内湾ぎみに立ち上がり山形口縁になると思われる。口唇部には刻目、口縁部は3条の突帯にやや間隔をおいて粗く刻目を施す。第Ⅵ層下部出土である。08は無文の胴部で穿孔がある。第Ⅶ層出土である。09は台形状に肥厚する口縁部で1条の凹線を巡らし、それを挟むように綾杉状に短凹線を施す。口縁部下で浅くて粗い連点文と凹線を施す。胎土に金雲母を含む。第Ⅶ層上部出土である。10は胴上部で6条の凹線の下に先尖の刺突連点文を施す。11は鋤状に肥厚する口縁部片で口唇部に斜めに刻目を、肥厚部に3条の凹線を施す。12は結束縄文を胴部に施文。第Ⅶ層出土である。13は山形口縁をなすと思われ、山形部分に突起を有する。胎土に金雲母を含む。第Ⅶ層出土である。14は地文に縄文を施文したあとの凹線と連点との幾何学的な組合わせである。第Ⅶ層出土。15は胴部に結束縄文を施す。第Ⅶ層出土。16はやや上げ底ぎみの底部である。第Ⅶ層出土。17は胴部で凹線を幾何学的に施す。第Ⅶ層出土。18は胴上部片で上部は凹線と連点の組合わせで、下部は結束縄文を施文。第Ⅶ層出土。19は結束縄文を転がした胴部片である。第Ⅶ層出土。27トレンチは北側に尾根状にのびる端部に位置し、アカホヤ層下で石が出土している。27トレンチの畑から弥生、ないし古墳時代の土器を表採している。



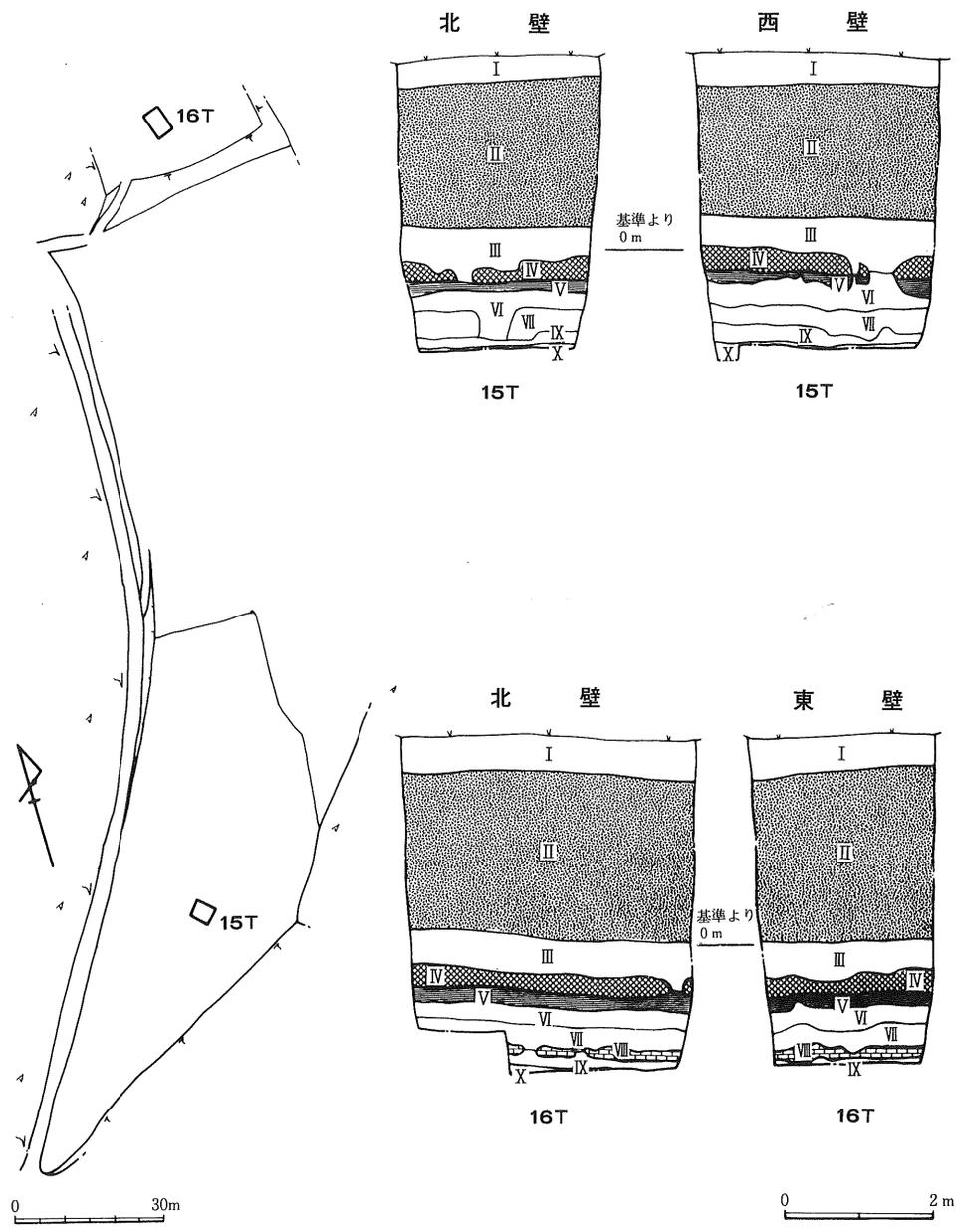
第4図 第1地区1~7トレンチ土層断面図



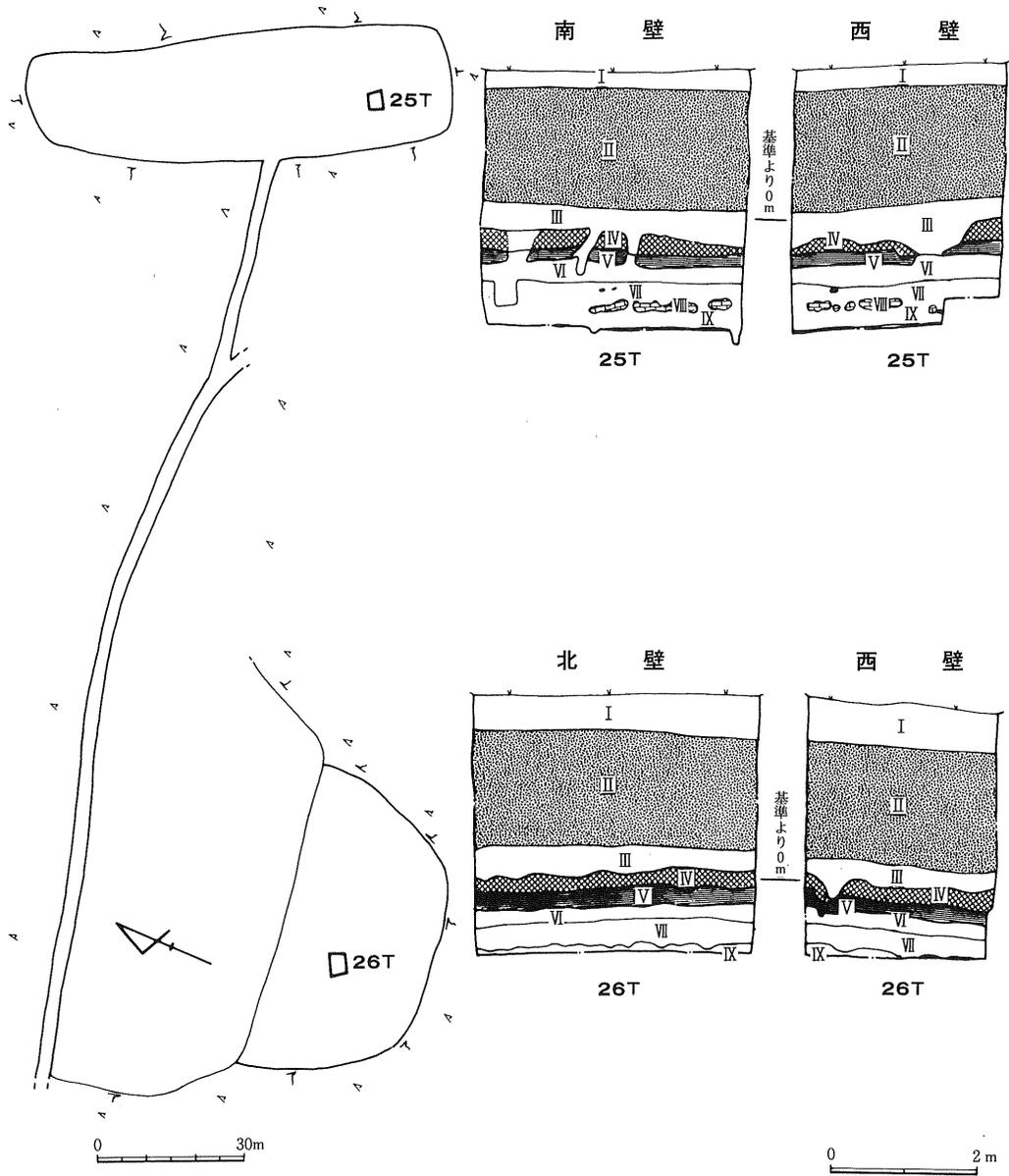
第5図 第2地区8~14トレンチ配置図及び土層断面図



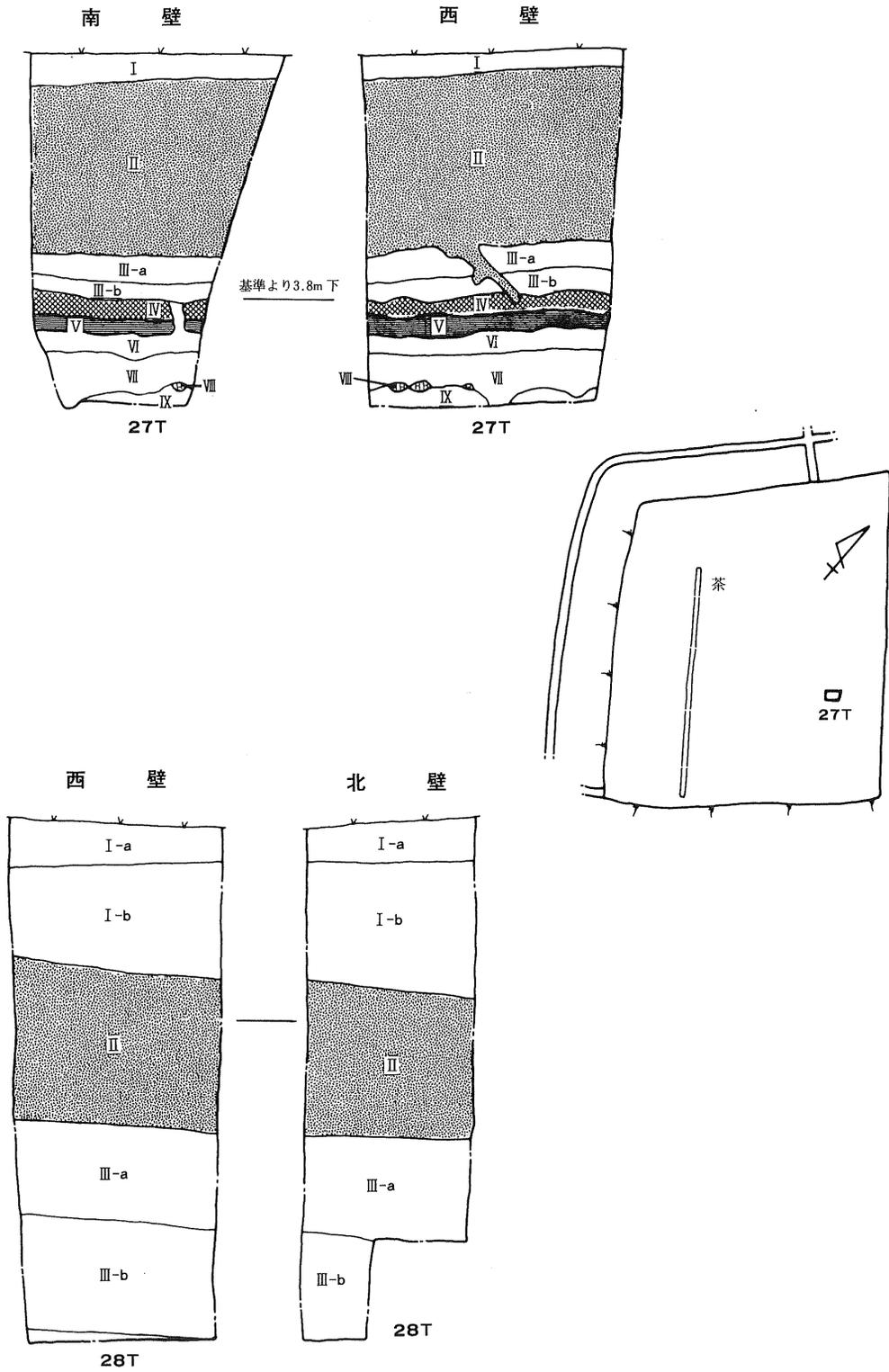
第6図 第4地区17~24トレンチ配置図及び土層断面図



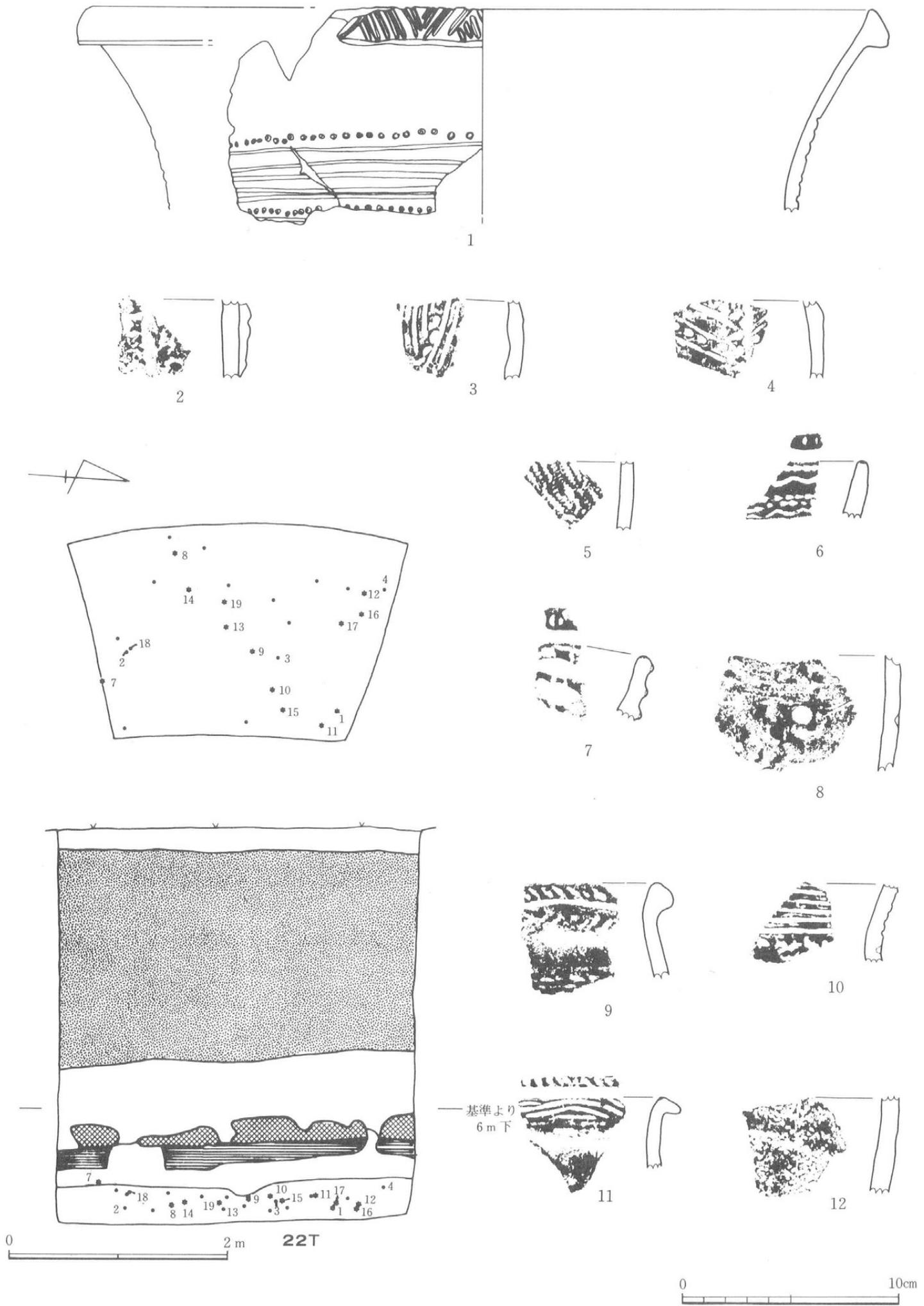
第7図 第3地区15・16トレンチ配置図及び土層断面図



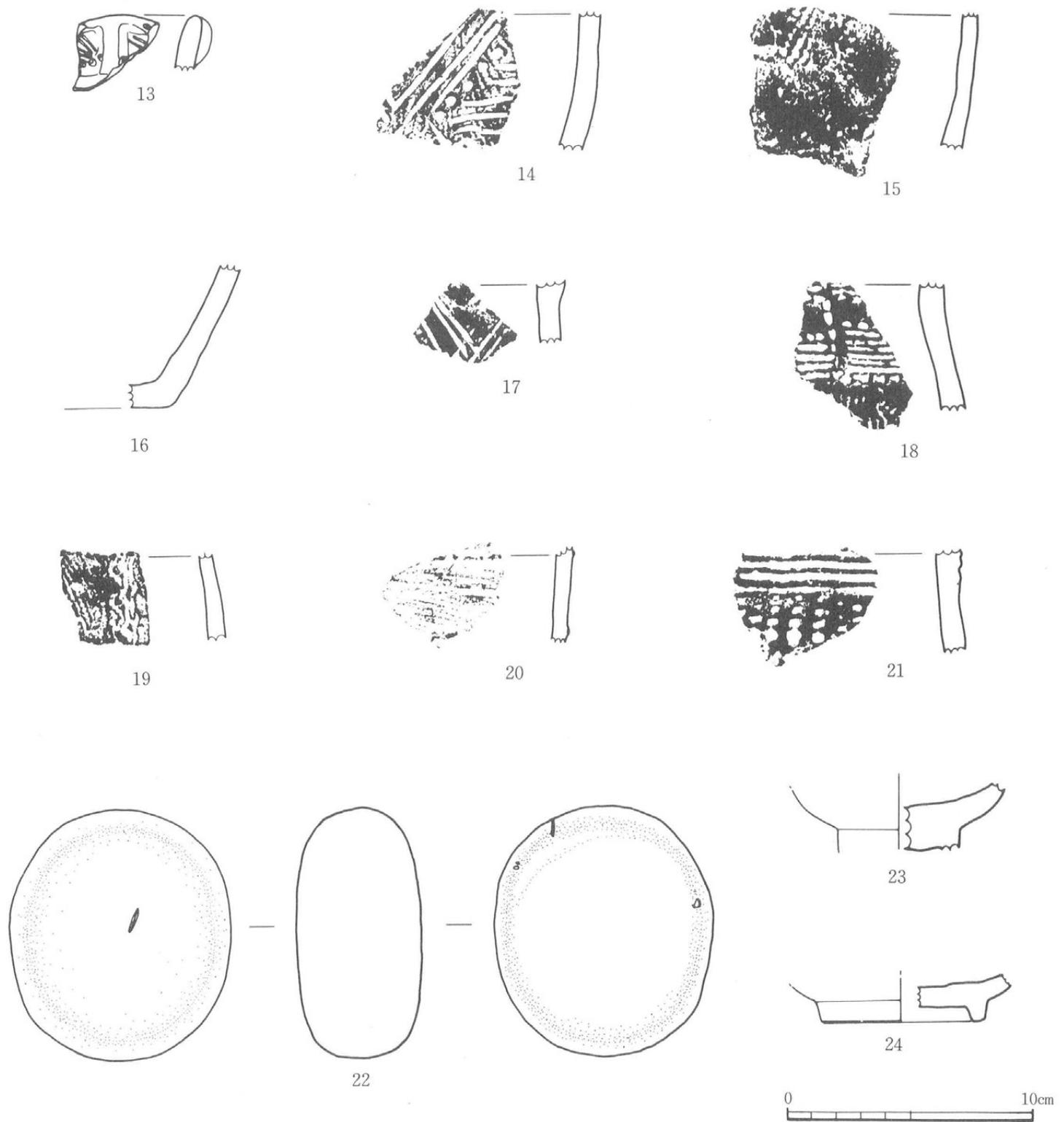
第8図 第5地区25・26トレンチ配置図及び土層断面図



第9図 第4・第6地区27・28トレンチ配置図及び土層断面図



第10図 22トレンチ遺物出土状況及び実測図



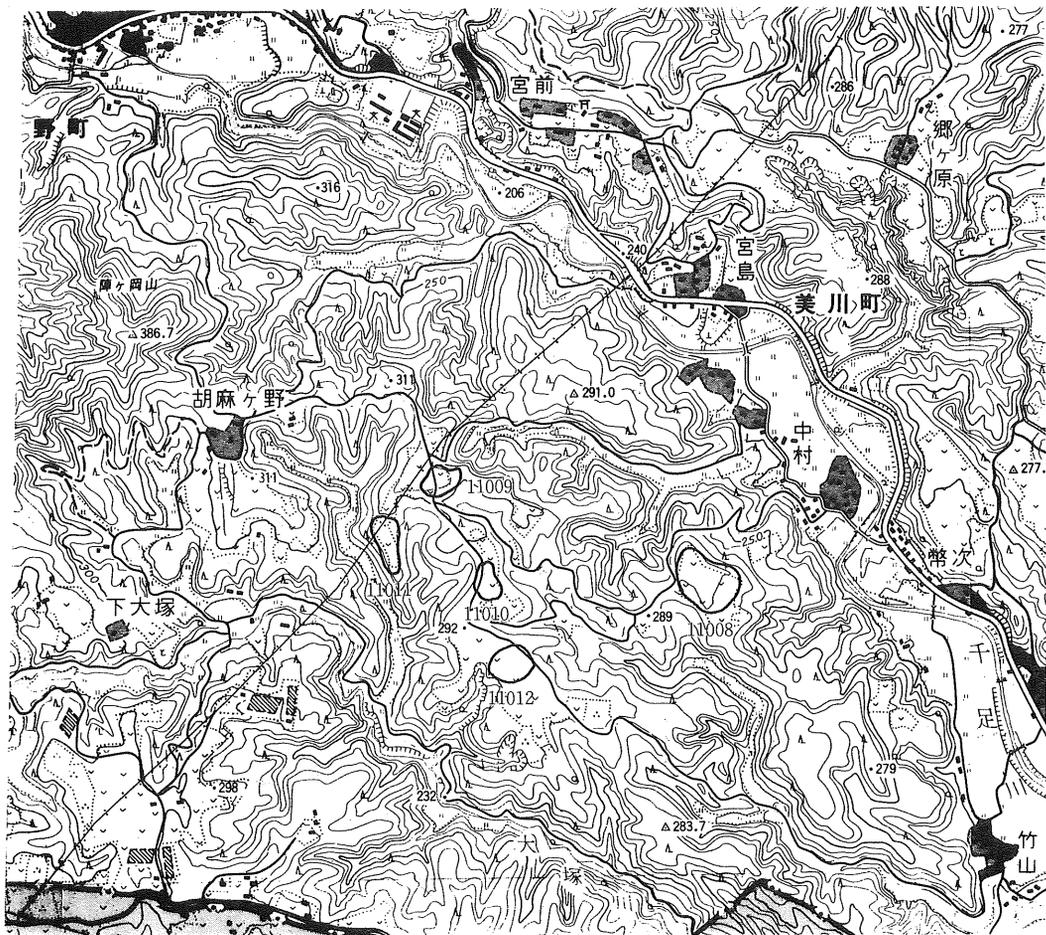
第11図 22トレンチ並びに調査区域内出土遺物実測図

(4) 第4地区〔25・26トレンチ〕(第8図)

胡麻ヶ野地区西側畑地である。25・26トレンチとも御池ボラ層下ではほぼ水平で、25トレンチでは第Ⅵ～Ⅶ層で石が出土する。26トレンチの表層は客土である。

(5) 第6地区〔28トレンチ〕(第9図)

高野地区の山腹畑地で地表面から約6m程掘り進んだが、アカホヤ層まで達することができなかつた。現地形よりもかなり傾斜している。遺物の出土はない。



遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代
11008	栗味	都城市美川町字栗味	散布地	縄文・近世	11010	水上第1	都城市美川町字水上	集落跡	縄文
11009	黒生第1	都城市美川町字水上 高野町字黒生	散布地	弥生・近世	11011	黒生第2	都城市高野町字黒生	集落跡	縄文
					11012	水上第2	都城市美川町字水上	集落跡	縄文・平安 近世

第12図 調査区域内遺跡分布図及び地名表

### 3. まとめとして

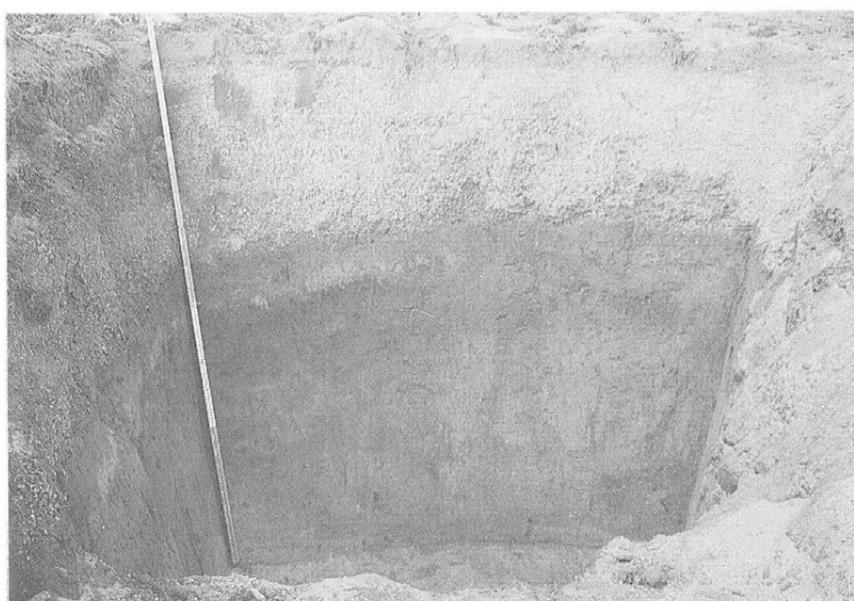
今回の試掘によって調査できた範囲においての遺跡の有無については第12図のとおりである。文化層で述べると、栗味・黒生第1・水上第2遺跡で弥生時代以降の遺跡を確認し、栗味・水上第1・黒生第2遺跡で縄文早期の遺跡を確認している。また、水上第2遺跡は縄文草創期の遺跡の可能性もある。また、今回の試掘で第Ⅵ・Ⅶ層から土器の出土はないが角礫等が出土しているトレンチがある。このことは早期の特徴である集石遺構との関係が示唆され遺跡の可能性が高い。

最後に、試掘対象面積350haのうち約20haの畑地のみを調査したわけであるが、都城盆地特有の御池ボラの厚い堆積により、縄文時代の遺跡を確認することはトレンチ掘りでは難しいことがわかった。試掘調査できなかった杉林等は今後改めて遺跡の有無を確認していかなければならない。

第1地区遠景



7トレンチ



11トレンチ



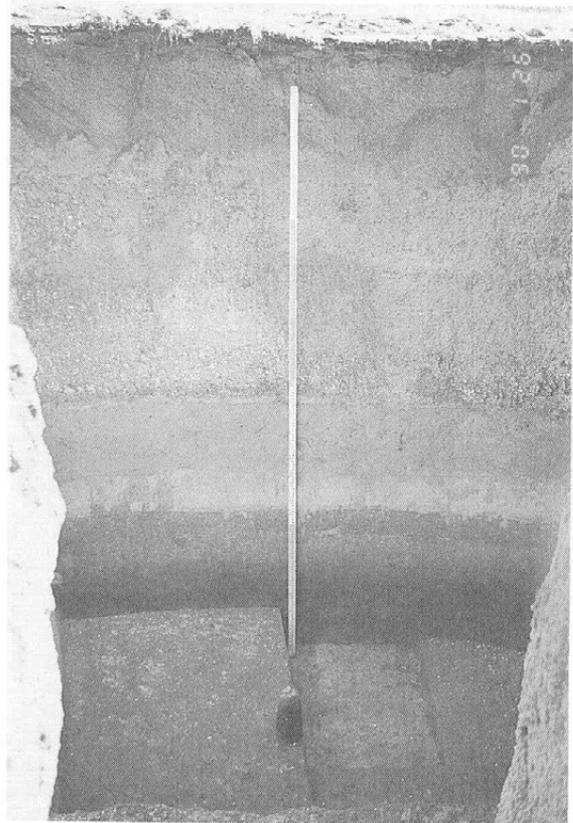
12トレンチ



17トレンチ



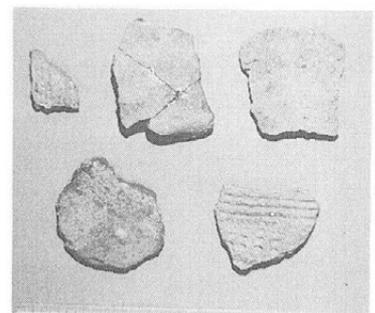
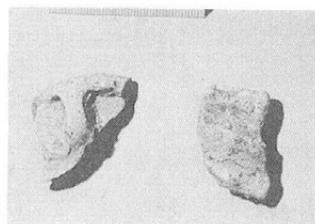
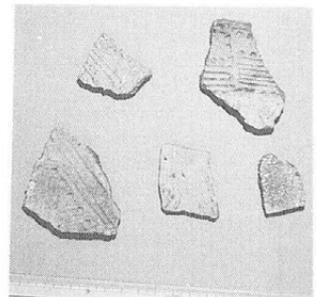
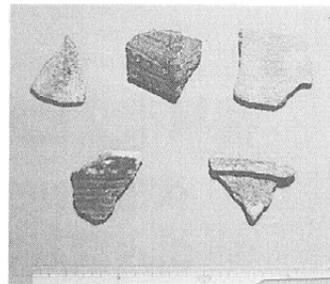
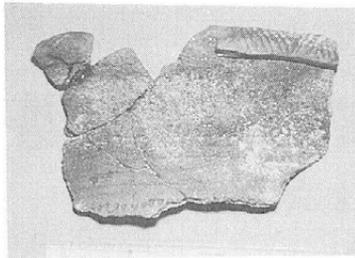
21トレンチ



22トレンチ



出土遺物



## 都城市文化財調査報告書第11集

久玉遺跡(第2次調査)

野々美谷城跡

向原第1・2遺跡

竹山・胡麻ヶ野地区試掘調査

発行年月 平成2年3月

発行 都城市教育委員会

印刷 (株) 都城印刷



ウエルネス  
都 城